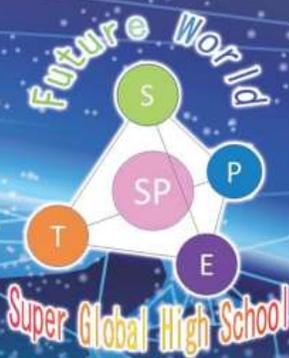


平成27年度指定  
スーパーグローバルハイスクール  
研究開発実施報告書  
(第五年次)



令和2年3月  
清風南海学園 中学校・高等学校

平成 27 年度指定 スーパーグローバルハイスクール  
研究報告書（第五年次）

第 I 部 元年度 SGH 研究開発完了報告書

令和 2 年 3 月

令和2年 3月 25日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 大阪府高石市綾園5-7-64  
管理機関名 学校法人清風南海学園  
代表者名 平岡正巳 印

令和元年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成31年 4月1日(契約締結日)～令和2年 3月31日

2 指定校名

学校名 清風南海高等学校  
学校長名 平岡正巳

3 研究開発名

エネルギーの観点から世界の改革を図る  
—未来を創造する産官学グローバルネットワーク構想—

4 研究開発概要

本年度は活動内容にさらに改良を加え、前年度までは高校1年次に年間を通じて行っていた「PESTゼミ基礎」を1学期で終了し、高校2年次に行っていた「PESTゼミ」を2学期から実施し、「シナリオ・プランニング」(以下「SP」)も3学期から開始した。SPは高校生にとって非常に難しい手法であるため、授業を早期に始めることで、よりSPに習熟させることを狙いとした。次年度におけるSP活動の充実が期待される。また、前年度同様、学外にでかけて調査を行う生徒が増え、課題研究に関わる情報収集を積極的に行っていた。

また、2年生においては「PESTゼミ」と各種コンテストを関連させた授業も展開され、SPを実践的に用いることで、SPに対する理解をさらに深める工夫を行った。また、他のゼミと協働して授業を行う取り組みも始めた。その結果、各種コンテストに出場する生徒が非常に多くなり、グローバルコース以外の生徒にもその影響が大きく及んでいる。さらに、中学校におけるポスター発表会実施を含め、学校全体にグローバル活動の効果が表れている。

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程												
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
①事業推進のための教職員の増員と会議時間の確保	→												
②国際シンポジウムの開催				→									
③教職員研修の実施	→	→	→										
④ICT環境の充実	→												
⑤連携先の新規開拓	→												
⑥中学ポスター発表の開催	→		→										
⑦成果の普及	→												

(2) 実績の説明

①事業推進のための担当教職員の増員と会議時間の確保

SGH事業を推進するため、SGH担当教員を昨年度と同様、24名とした。昨年度から加わった外国人教員にも積極的に意見を述べる機会を与え、事業をさらに効果的なものとした。また、昨年度同様、授業時間内に定期的に会議を開催できるよう時間割を配慮した。

②国際シンポジウムの開催

今年度も11月に第4回目の国際シンポジウムを開催した。海外4カ国から5校(生徒10名、教員5名)を招き、数日の準備活動を経て発表を行った。また、近隣の高校4校(生徒43名)にお越しいただき、午後からのポスター発表会を盛り上げていただいた。本校の中学生や保護者などを含み約700名の参加があった。

③教職員研修の実施

5月、6月、7月に教職員研修を実施した。特に7月には教職員全員(約100名)にグローバルコースで実施しているゼミ活動を体験する機会を持っていただき、SGH活動への理解を深めるとともに、探究的学習指導法の導入に向けた啓発の機会とした。

④ICT環境の充実

中学・高校の全教室に電子黒板を設置しており、教職員同士で授業での利用法に関する情報交換が積極的に行われている。また、利用率も年々アップしている。また、高校生全員にタブレットを持たせており、授業だけでなく日常の連絡もそれを通じて行っている。



#### \*Technological ゼミ

- ・高校1年生では、日常の生活を豊かにしてきた「もの・サービス」から、それを支える科学技術について知見を広げる活動を行った。科学技術が現代社会における課題に対してどのようにアプローチすることができるのかを、様々な観点から考察し、具体的かつ実践的な解決方法を考える訓練を重ねた。
- ・高校2年生では、環境問題とエネルギーをテーマに世界が抱える問題について幅広い知見を身に付けることを目標として活動に取り組んだ。再生可能エネルギーについて学ぶことで、環境問題について科学的・技術的な視点から理解を深めることができた。長期的な視野で問題解決に取り組まなければならないため、SPの重要性の理解にも役立つと思われる。

#### ②SP

SPは本校のSGH構想の中核をなすものである。PESTゼミのグループから2～3名ずつを集めた8～10名程度のSPグループを作り、それぞれの視座から多様な意見が出されるようにしている。昨年度と同様、主体者（実際の世界ではクライアントとなる）が誰であるかを明確に意識させ、その主体者に対してどのような提案ができるかも考えさせた。また、各種コンテストへの参加にあたって、SPを用いて構想を練ったチームが多くなっているが、SPの実践的活用ができたという点で、大きな成果である。また今年度は、PESTゼミにおいてもSPを意識した活動が多く取り入れられた。このことにより、PESTゼミとSPとの関連性が非常に強くなったことは、大いに評価できると自負するものである。

#### ③Global English（以下「GE」）

- ・高校1年生では、英語によるコミュニケーション能力とプレゼンテーション能力を身に付けることを目標として活動を行った。模範的なプレゼンテーション（スティーブ・ジョブズによるものなど）を見せた上で、どのようなプレゼンが効果的かを考察し、分析したのちにプレゼンを作成させた。また、プレゼンのテーマも生徒にとって取り組みやすいもの（ドラえものの道具など）とした。
- ・高校2年生では、SPの発表を英語で行うことを目標とした。これは、修学旅行（オーストラリア）や国際シンポジウムにおいて、SPを英語で説明しなければならないからである。単に英語力だけではなく、自分の説明を客観視する能力や物事を俯瞰してとらえる能力も同時に鍛える訓練を行った。

#### ④卒業論文制作

昨年同様グローバル活動の集大成として、これまで行ったSPを卒業作品集としてまとめた。SPの特性上、グループで制作する部分と個人で制作する部分とに分けて編集を行った。また、英語によるアブストラクトも執筆した。論文集は研究報告書とともに各SGH高に送付する。

#### ⑤外部講師による授業

本校に講師の先生をお招きし、グローバルコース生（以下「GL生」）を対象に、講演や特別授業（ワークショップ活動）を行っていただいた。テーマは多岐に渡っており、環境からジェンダー、SDGsや企業の取り組みなど生徒にとって興味深いものであった。また、PESTゼミの各分野において、生徒の発表を見ていただいてアドバイスをいただく授業なども行われた。

#### ⑥国内・海外フィールドワーク

国内では大学や研究所を訪問して1日で実施するフィールドワーク活動を数回行い、大学生の発表に対して質問を行ったりなど、様々なワークショップ活動を実施した。また、海外での活動としては、8月には高校2年GL生全員が参加するオーストラリア研修旅行を実施した。

3月には選択制で東京方面コース、マレーシア・シンガポールコース、フィリピンコース、さらにはベトナムコースの4コースを設定し、それぞれ高校や大学、現地企業等を訪問し協働学習や事前課題に関するプレゼン発表、ディスカッション等を行う予定であったが、新型コロナウイルスの影響により、全てのフィールドワークが中止となった。

#### ⑦国際シンポジウム・中間発表会

11月に第4回目となる国際シンポジウムを開催し、海外から5校10名の生徒を招聘し、約1週間にわたって本校生と共に準備を行い、当日はプレゼン発表やパネルディスカッションを行った。司会進行と高校2年生の発表は英語で行い、パネルディスカッションも英語で行った。また、第2部のポスター発表には国内の4校も参加していただき、お互いに良い刺激を得る機会となった。また、2月には中間発表会を開催し、こちらは高校1年生が主体となり、発表会の運営を行った。

#### ⑧ICT・ポートフォリオ

毎回の授業後、あるいは講演会や行事ごとに、タブレットを用いて各自でポートフォリオ作成を行わせた。本校ICT委員会と連携を取りながら、新入試制度に対する準備を行っている。

#### ⑨留学・海外交流支援

本校は「トビタテ留学JAPAN」に毎年10名以上の合格者を輩出しているが、本年度も11名の生徒がそれぞれ海外へと飛び立った。また、アメリカのChoate Rosemary Hall校が主催する夏期研修プログラムにも毎年2名の生徒が参加し、有意義な体験活動を行っている。

#### ⑩SP教員研修

SPの手法は教員にとっても難しいものであるため、年間を通じて数回研修を行った。今年度は社団法人シナリオプランナー協会による協力のもと、充実した研修を行うことができた。

## 7 目標の進捗状況、成果、評価

PESTゼミやSP、GEにおいては4年間の実績を踏まえ、毎年改善を加えて実施しており、特に今年度は、高校1年次におけるカリキュラムの改定に取り組んだ。具体的には、「PESTゼミ基礎」を1学期で終了し、2学期からは従来高校2年で行っていた「PESTゼミ」を行い、さらには3学期から早くもSPを開始した。さらにはSPの教材化も着実に進んでおり、まだまだ改良の余地はあるものの、SPワークブック教材を生徒に配布した。また、各種コンテスト等に参加する生徒が昨年度からもさらに増えており、GL生だけでなく、一般コース生も多く参加するようになった。また、GL生と一般コース生とがグループを作って参加する場面も多く見られている。さらには、中学生のポスター発表会においてもその質は年々向上しており、中学生がGL生のポスター発表を見学したり、GL生が中学生に対してアドバイスを行ってきたりしたことが、大きな成果として表れていると感じられる。主体性を育成するための活動としてグローバルコースが設置されたが、このコースを起点とした影響が学校全体に広がっていることは明白である。これは、下記アンケート結果や各種コンテストでの成果によって明らかであると考えられる。

中間評価で指摘のあった「教員チームによる実績」という点については、SGHプロジェクトチームでは昨年度に引き続き各学年において週1回の会議を持ち、連携を密にした。また、全体に関しては、SGHプロジェクトチームの教員が主体となり、全教職員に対してワークショップ研修を実施し、課題探究活動の意義や重要性の理解を促した。また、ポスター発表を行う際に、GL生自身が色々な先生方に見学をお願いし、参加された先生にはコメントを求めている。(これはGL生の自発的行動である。)このことにより、教員の中でSGH活動への理解がさらに深まり、活動に対して肯定的な言動が多く見られるようになった。生徒の主体的な行動が、教員の意識の変化を生むきっかけとなったと言える。

### 【アンケート結果】

- (1) この1年間で発表・議論などにおいて、英語を活用する力が身についたと思いますか。

「大いにある」「ある」と答えた生徒 GL生 74% 一般生 37%

※以後のアンケートに関してはこの1年間で身についたと思う力について言及する。

- (2) 情報収集やプレゼンテーションなど、ICTを活用する力

「大いにある」「ある」と答えた生徒 GL生 82% 一般生 45%

- (3) グループ活動での自発的な行動をとる姿勢

「大いにある」「ある」と答えた生徒 GL生 80% 一般生 54%

- (4) 自らの考えや論拠を整理して議論し、質問に答える力

「大いにある」「ある」と答えた生徒 GL生 83% 一般生 48%

- (6) 世界の色々な問題について興味を持ち、グローバルな視点で考える力

「大いにある」「ある」と答えた生徒 GL生 77% 一般生 46%

- (7) グループの中でコミュニケーションを図り、目的のために協働する力

「大いにある」「ある」と答えた生徒 GL生 80% 一般生 55%

- (8) 卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力として

CEFRのB1~B2レベルの生徒の割合 GL生 69% 一般生 60%

### 各種コンテストや発表会への参加状況

キャリア甲子園 2019	: 決勝進出 (1チーム), 準決勝進出 (7チーム)
第7回高校生ビジネスプラン・グランプリ	: Best100 (1チーム)
第61回大阪府統計グラフコンクール	: 入選 (1チーム)
第67回統計グラフ全国コンクール	: 入選 (1チーム)
第2回SGHフォーラム	: 参加 (1チーム)

## 8 次年度以降の課題及び改善点

- (1) 教育課程の研究開発の状況について

スーパーグローバルハイスクールの指定を受け、3年間の「総合的な学習の時間」の単位数を6単位とし、課題探究活動に充てることとした。そのため、国語・数学・理科・英語の単位数を減じた。また、課題探究活動の一環として、国内外のフィールドワークや国際シンポジウム等を開催した。特に海外フィールドワークや国際シンポジウムにおいては、外国人高校生と協働して活動するため、多様な価値観に触れることができ、視野を広げる良いきっかけとなった。

- (2) 高大接続の状況について

この5年間に於いて、国内では京都大学を始めとし、大阪大学、筑波大学、東京工業大学、関西学院大学、立命館大学と多くの大学との連携活動を実施した。大学より先生を派遣していただいていた授業(ワークショップ活動)を行っていただいたり、こちらから大学を訪問し、大学生や大学院生と一緒に授業に参加させていただいたり、最先端の研究のお手伝いをさせていただいたり、活動内容は多岐にわたった。ただし、大学の単位履修制度は設置していない。

- (3) 生徒の変化について

この5年間でGL生は論理的・批判的思考力や課題発見能力、協働力など様々な能力の向上が見られる。これは一般コースの生徒と比較して、授業時の質問の多さや、プレゼン発表時の質問やコメントの質や量からも見て取れる。また、各種コンテストへの参加者数やトビタテ留学JAPANの合格者数からも分かるように、校外での大会やプログラムに積極的に参加するようになってきている。さらに、GL生の影響を受け、一般コースの生徒もこのような大会やプログラムに参加するようになったことは、大きな変容であると言える。諸大会にはGL生と一般コース生がチームを組んで出場することも多くなり、喜ばしいことと感じている。以下に、5年前と今年度のGL生の比較の一部を掲載する。

CEFR の B1～B2 レベルの生徒の割合	5年前	15%	今年度	69%
情報収集やプレゼンテーションに ICT を活用する力がついた	5年前	75%	今年度	82%
グループ活動で自発的な行動をとる姿勢がある	5年前	74%	今年度	80%
自らの考えや論拠を整理して議論し、質問に答える力がある	5年前	78%	今年度	83%
世界の色々な問題について興味を持ち、グローバルな視点で考えることができる	5年前	73%	今年度	77%
公益性の高い国内外の大会における入賞者数	5年前	2名	今年度	25名
トビタテ留学 JAPAN を始めとした留学生数	5年前	3名	今年度	11名
※なお、トビタテ留学 JAPAN の合格者数は、ここ5年間で48名となっている。				

#### (4) 教師の変化について

SGH プロジェクトチームに所属する教員数は当初12名であったが、今年度は24名となっており、その中には外国人教員も3名含まれている。また、毎年プロジェクトチームの教員は少しずつ入れ替わっており、5年間で全教員の半数近くがプロジェクトチームに所属したことになる。また、授業担当者は課題探究活動の指導を行わねばならないため、通常の教科指導とは異なった知識やものの見方を習得しなければならず、大いに視野を広げる結果となっている。また、3年前より中学校でのポスター発表会が始まったため、SGH プロジェクトチーム以外の教員の多くが課題探究活動の指導に携ることになり、SGH 活動で培ったノウハウが役立っている。各種コンテストに参加する生徒も毎年のように増え、こちらの指導に当たる教員も多様な知見を身に付ける必要があり、教員自身のレベルアップにつながっている。さらには、プロジェクトチームのメンバーによる会議を定期的に持つようになり、それぞれの授業担当者の横のつながりが密接になり、より効果的な指導が実施されるようになった。

#### (5) 学校における他の要素の変化について

スーパーグローバルハイスクールの指定を受け、全教室に電子黒板を設置し、高校生にはタブレットを持たせることになった。これにより、授業形式が大きく変容を遂げた。現在では多くの教員が電子黒板を活用し、それぞれが工夫した授業を行っている。また、アクティブラーニングの授業を実施する教員も増え、教員からの一方通行の授業が減りつつある。中学校では3年前よりポスター発表会を実施し、中学生にも課題探究活動を行う機会を与えている。また、高校でプレゼン発表やポスター発表大会を開催する学年も出てきた。

本校では年に2回大きな発表会を行っている。11月の国際シンポジウムと2月の中間発表会

である。発表会当日の午後には、近隣の他校を招いてポスター発表会を行うのだが、その際、保護者から鋭いコメントや質問がなされるようになってきた。参加される保護者の数も増えてきたが、単に見学するだけでなく、積極的に生徒たちに働きかける保護者が多くなってきた点は喜ばしいことであると感じている。

#### (6) その他課題や問題点について

まず、本校のメインプログラムであるシナリオ・プランニング（以下 SP）は本来がビジネスにおける未来予測の手法であるため、高校生が取り組むには非常に難しいものであると実感している。本校では GL 生全員に取り組みさせていたが、一部の生徒には無理があったかと感じている。GL 生は、進学校である本校の高度な授業をこなすと同時に、SGH 活動に取り組みなければならぬため、発表会の前などは負荷が大きすぎたように思われる。もちろん、毎年改善を加えてはきたが、上記のような問題点を完全に解決することはできなかった。

#### (7) 研究開発完了後の持続可能性について

今年度の高校1年生と2年生に関しては、これまでと同様の課程で、卒業まで SGH 活動を継続していく。新高校1年生に関しては、「グローバル探究ゼミ」を立ち上げ、学校設定科目として探究活動を継続実施していく。これは、第8限目に実施し、1単位分の増単位とし、希望生徒が選択する形態となる。高校1年次の前半は基礎的な知識や技法を習得させ、後半からは4つのゼミに分かれ、個人またはグループでの課題探究活動を行う。高校2年次も継続的にゼミ活動を行い、最後には論文等の成果物を作成する予定である。

これまで実施してきた国際シンポジウムや春期フィールドワークも継続実施とする。つまり、今までに培ってきた海外校との連携、協働探究活動は持続的に行うものとする。もちろん、大学や企業、研究機関等との連携も継続する。

管理機関としては、これまで同様の支援を行う。具体的には、教員の人員確保や配置、時間割への配慮を行い、探究活動を円滑に実施するために必要な経費の支出を行う。また、中学でのポスター発表を高校への探究活動につなげることができるよう、プログラム内容の改善や教員研修を適宜行っていく。

#### 【担当者】

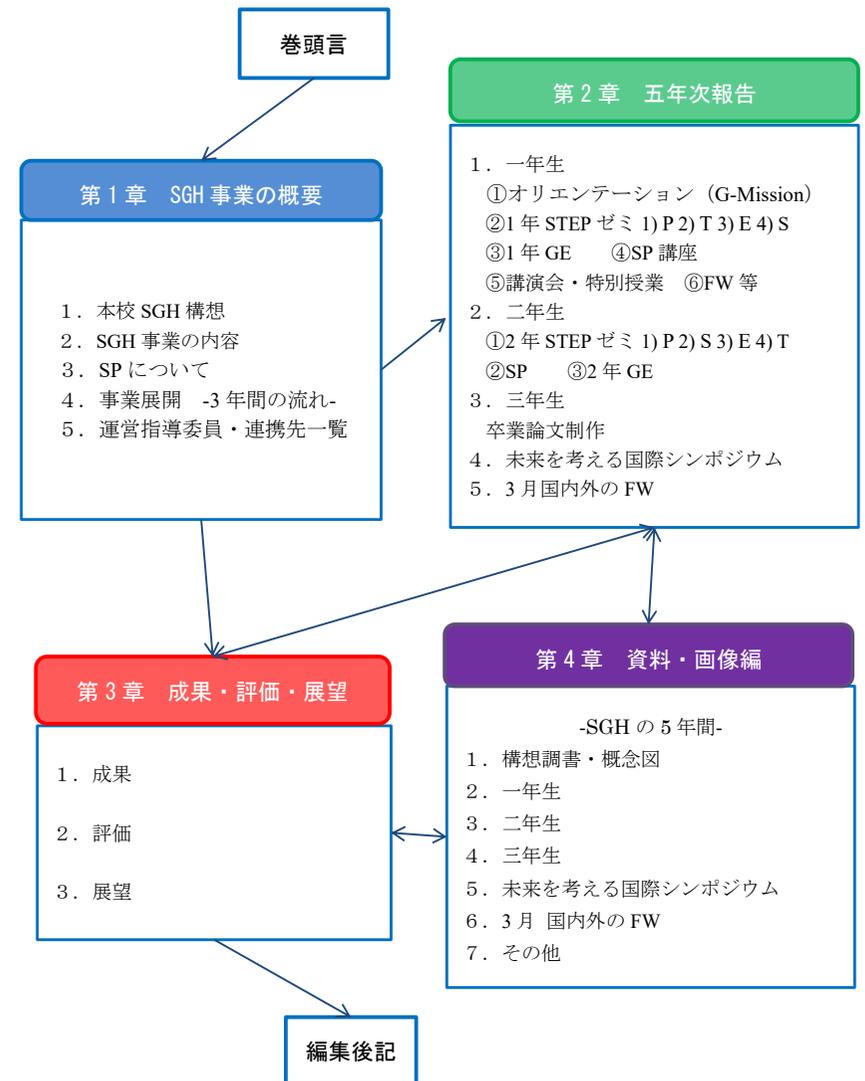
担当課	総合企画部	TEL	072-261-7761
氏名	吉田 成（あきら）	FAX	072-265-1762
職名	部長	e-mail	sg@seifunankai.ac.jp

平成 27 年度指定 スーパーグローバルハイスクール  
研究報告書（第五年次）

第Ⅱ部 元年度 SGH 研究開発実施報告書（五年次）

令和二年 3 月

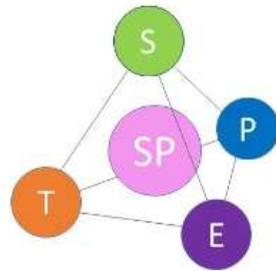
## 第Ⅱ部の構成



注 SP: シナリオ・プランニング, GE: グローバル・イングリッシュ, FW: フィールドワーク

－第Ⅱ部 目次－

		ページ
巻頭言		3
第1章 SGH 事業の概要		5
1.	本校の SGH 構想	6
2.	SGH 事業の内容	7
3.	シナリオ・プランニング(SP)について	8
4.	事業展開 － 3年間の流れ －	10
5.	運営指導委員・連携先一覧	11
第2章 五年次報告		13
1. 一年生	① オリエンテーション (G-Mission)	14
	② 1年 STEP ゼミ 1) Political 2) Technological 3) Economic 4) Societal	16
	③ 1年 Global English (グローバル・イングリッシュ)	24
	④ シナリオ・プランニング(SP)講座	25
	⑤ 講演会・特別授業	26
	⑥ Field Work (フィールドワーク) 等	28
2. 二年生	① 2年 STEP ゼミ 1) Political 2) Societal 3) Economic 4) Technological	30
	② シナリオ・プランニング(SP)	38
	③ 2年 Global English (グローバル・イングリッシュ)	40
3. 三年生	卒業論文制作	42
4.	未来を考える国際シンポジウム	44
5.	3月 国内外のフィールドワーク	48
第3章 成果・評価・展望		53
1.	成果	54
2.	評価	56
3.	展望	58
第4章 資料・画像編 -SGHの5年間-		61
1.	構想調書・概念図	62
2.	一年生	66
3.	二年生	69
4.	三年生	72
5.	報告書等	73
6.	国際シンポジウム	74
7.	国内外フィールドワーク	78
8.	その他	80
編集後記		82



月日のたつのは早いもので、平成 27 年に文部科学省からスーパー・グローバル・ハイスクール (SGH) の指定を受けて、5 年が過ぎました。この間、多くの皆様に御指導、御支援して頂きましたことに深く感謝申し上げます。

本校の所在地高石市は、萬葉集で詠われたぐらい白砂青松の地として有名でありました。その砂浜は、本校開校 2 年目から埋め立てが始まり、石油化学が中心の泉北臨海工業地帯に変わりました。そんな経緯を受けて本校 SGH の大きなテーマを「エネルギー」としました。エネルギーをテーマとするにあたり、昭和シェル石油の指導を仰ぎ、シェル石油がオイル・ショックを克服した未来を予測する手法、シナリオ・プランニングを学び、その手法の理解と活用を学習の目的としました。

幅広い基礎知識を学ぶ分野の頭文字をとって本校では STEP と呼んでいます。一年次は社会学的分野 (Societal)、科学技術的分野 (Technological)、経済学的分野 (Economic)、政治学的分野 (Political) の基礎を学び、二年次はその中から一つを選択し、各分野の知識を深め、シナリオ・プランニング (未来予測) をするわけであり。三年次の一学期には総仕上げをし、立派な論文も仕上げています。

各学年約 80 名のグローバルコース (G コース) ですが、学校全体に良い影響を与えました。中学校においてはポスター発表を行い、各学年におけるアクティブ・ラーニングの良い機会として重要な行事となっています。高校では、ネイティブの先生を各学年に一人ずつ配置するとともに、生徒は、全授業をタブレット持参で受けています。G コースでは、アクティブ・ラーニング方式の授業が多いのですが、一般コースにおいてもそうした授業が多くなりました。また、生徒は海外留学にも強い関心を寄せるようになり。文科省の「トビタテ留学 Japan」に、ここ 4 年間、毎年 10 人以上の合格者を出しており、全国で一位・二位を争っています。510 人の募集に対し 2 千人以上が応募する狭き門であり、学術分野、奉仕分野、職業分野など、多岐にわたる分野でそれぞれ長期・短期に分かれています。たとえば、この制度を活用して本校から 1 年間米国の高校に留学している女子生徒は、本校を卒業すれば、米国の大学に進学することを希望しています。短期ではありますが、エール大学で学んできた女子生徒もいます。他にも地中海の英領マルタ島やオーストラリア、ニュージーランドなど、各地の高校で学んでいる生徒たちがいます。また、職業分野では男子生徒がカナダで起業について学んでおり、奉仕分野では男子生徒が 58 日間、南アフリカやケニアで活躍しました。あるいは、ネパールの保育園やフィリピンの公衆衛生施設、フィジーの幼稚園で世界の若者と一緒に活動する女子生徒たちも存在します。一方、中学校では、二年次にニュージーランドの北島で現地 4 泊 5 日の修学旅行を行っています。農家に 2 泊し、日中は家主の指導で様々な作業を手伝い、夜は団欒の一時を過ごします。1 日はプタルル・カレッジを訪れ、学校あげでの歓迎の中、活発な交流活動を行っています。その他の海外行事としては、ニュージーランド語学研修やロータリー・クラブが支援するインターアクトクラブ (IC) の海外研修があります。本校は中高併せて約 1,800 名の学校ですが、ここ 4 年間で毎年延べ 500 名弱の生徒が海外教育プログラムに参加しています。この数字は生徒総数の約 4 分の 1、高 3 生を除くと約 3 分の 1 にあたり、このことは特筆すべきことであります。

近年、グローバル化は競争時代から、競争プラス協働の時代と言われていています。宇宙開発が良い例であり、日本からも 10 人の宇宙飛行士が宇宙ステーションで調査・研究しています。グローバル化は地球が存在する限り、ますます進むと思われ。SGH が終わってもその長所を生かし、本校に合った形式で G コースは残したいと考えています。SGH の 5 年間御指導と御支援を深謝すると共に、今後は新たに「グローバル探究ゼミ」として活動しますので、倍旧の御指導、御鞭撻をお願い申し上げます。

## 五年次報告

1. 一年生 ①オリエンテーション (G・Mission)  
②1年STEPゼミ ③1年GE ④SP講座  
⑤講演会・特別授業 ⑥FW等
2. 二年生 ①2年STEPゼミ ②SP ③2年GE
3. 三年生 卒業論文制作
4. 未来を考える 国際シンポジウム
5. 3月 国内外のフィールドワーク

## 1. 一年生

### ① オリエンテーション (G-Mission)

#### 【意義・ねらい】

- ・総合的な学習の時間の雰囲気を体感する。
- ・グローバルコース生としての自覚を持たせる。
- ・意見を出し合うことに対する抵抗をなくす。
- ・明確な正答が存在しない問いに取り組む姿勢を身につける。
- ・実際に議論を体験した後で、議論の際に注意すべきことをまとめた『議論の五箇条』を考える。その際、ブレインストーミングの手法で発散と収束を行い、班の意見として一つにまとめていく。



#### 【授業の流れ】

1回目	総合的な学習の時間の進め方。G-Mission 1 導入：ブレインストーミングの手法で、絵から読み取れる事実と比喩表現に関する意見を出していく。
2回目	G-Mission 1：前回考えた比喩表現が書かれた付箋と合わせて描かれた絵の場面設定をした後、班の中で発表し合う。
3回目	班の中で一番説得力があった意見を採用し、その意見をもとに絵のタイトル・場面設定を決定し、絵の解説を書く。
4回目	班で決めた絵のタイトルや場面設定、またなぜそのような考えに至ったのかをパワーポイントを使って各班3分間で発表。
5回目	G-Mission 1のフィードバック。発表と準備について班で自己評価。独創性がなかったのはなぜかなどの反省点に関して考える。
6回目	G-Mission 2：議論5箇条を考える。議論において何が大切と感じたかを付箋に書いて意見を出し合う。多かった意見をもとに、高1グローバル生全体の5箇条を作成。

#### 【生徒作品・成果物】

13班 今日 die

まず、私たちはこの写真を見て場所に注目しました。中がトンネルようになっていて壁が体内のような色をしています。だからここは体内だと考えました。次に写真に注目しました。風船は子供のイメージがあるし赤い色をしているのでこの二つの風船は赤ちゃんを表していると考えられます。これよりここは、体内だと考えられます。また子宮の中の人数は写真に写っている人と目線の人の二人であると推測できます。よって、この子宮の中には「双子の兄弟」がいると考えられます。階段の下の方は暗く、上の方は少し明るくなっていることから、上にいる兄だけ生まれて下にいる弟は死んでしまうのでは、と思いました。この写真は振り返ることのない兄を眺める弟の目線だと思います。生まれることができ未来がある兄を見つめるしかない今日死んでしまう弟、これと「兄弟」という言葉をかけて、私たちの班は、この写真の題名を「今日 die」とつけました。



**議論の五箇条**

一、どんな意見でも貢献につながる。勇気をもって積極的に自分の意見を発表すべし。

一、相手の立場を考え、発言の内容と意図を理解すべし。

一、想像力を働かせながら、独創性のある自由な発想を指すべし。

一、意見を整理しながら考え、共通理解を深めるべし。

一、活動がスムーズに進むための役割と責任を果たすべし。

#### 【生徒の感想】

- ・初めてにしてはそこそこできたんじゃないかなと思いました。反省点は、放課後とかに話し合いをする時間をあまり設けなかったのがいざばんよくなかったです。他には発表で変に緊張して発表がしどろもどろでした。全体を通して多数の人と議論し、考えることが難しいと再確認しました。
- ・意見を出すという点では十分に出すことができたと思う。積極的に話し合っただけの意見に対して意見をプラスしていくことができた。発表に臨む準備が少し甘かったので放課後にもっと集まって発表の練習をすべきだった。いい雰囲気の中みんなが楽しくできたので良かった。
- ・反省点は多々あるが、それでも大きな達成感を得られた活動であった。発表準備において大役である原稿作成、そして本番発表を全うできた。ポートフォリオを見ると、自分なりにいろいろ想像、考えを膨らましていたことが伺える。積極性を忘れず、班に貢献できたのではないかな。



#### 【講評】

この活動は、高1生にとって最初の活動だったが、想像以上に意見を出し、時間内にまとめあげることができていた。また、発表の準備では、放課後を使いながらグループで相談し、期限内に提出物を出さなければならないという責任感を感じることができた。議論で何が大切かを考えることで、議論の際に注意すべきことをグローバル生の中で共通して認識するきっかけとなった。

②1年 STEPゼミ

1学期はSTEPゼミ基礎として各分野を3時間ずつ行った。2学期からは各ゼミに分かれて探求活動を行った。

1) Political (政治学的分野)

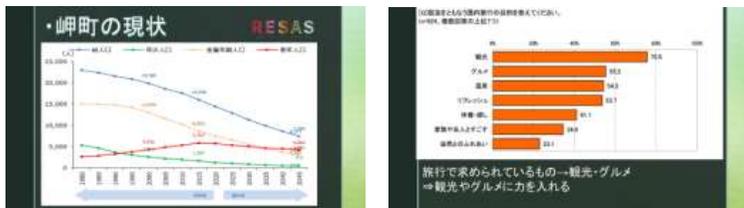
【意義・ねらい】

高1のPoliticalゼミでは、政治課題について考え、模擬国連に参加することで政治的感覚を身につけ、社会における利害調整に必要なことや合意形成の仕方について学ぶことを目的とする。今年度は、基礎ゼミにおいて模擬国連演習として「国連弁当」の立案、ゼミの前半は「地方創生政策アイデアコンテスト」への応募に向けての立案、後半は模擬国連活動を行った。

【授業の流れ (基礎ゼミ・前半)】

	回	内容	生徒の動き
基礎	1回目	「国連弁当」について	ガイダンス。担当国を決め、自国のリサーチを行う。
	2回目	「国連弁当」案の作成	弁当を通じて得られる利益・不利益を考慮し、立案する。
	3回目	他国との交渉	他国と交渉し、賛同する国を集める。3回のレビュー。
ゼミ	4回目	コンテストの紹介	班決め (5人×4班)。コンテストの過去の受賞作品を見る。
	5回目	課題発見・自治体の選択	「RESAS」を使い、自治体の課題を発見する。
	6回目	内容の検討①	グループごとに発表する内容を検討する。
	7回目	内容の検討②	グループごとに発表する内容を検討する。
	8回目	発表①	各班5分で発表する。1班ごとに3分の質疑応答を行う。
	9回目	内容の検討③	他グループの意見などを参考に、内容を検討する。
	10回目	応募	規定の応募フォームを入力する。
	11回目	内容の検討④	グループごとに発表する内容を検討する。
	12回目	発表②	各班5分で発表する。1班ごとに3分の質疑応答を行う。

【生徒作品・成果物】 「岬町PR」班の発表スライド



【授業の流れ (後半)】

13回目	議題発表 担当国決定
14回目	Position Paper 作成
15回目	Policy Paper 作成
16回目	会議
17回目	会議の反省 中間発表準備



【生徒の作品】

ベトナムの Policy Paper



投票の結果

Iceland	yes
Iran	yes
Sweden	yes
Spain	yes
Papua New Guinea	yes
Viet-Nam	abstention
Belarus	yes
South Africa	no
Russian Federation	yes

スペインのDR (決議案)

- 1: 常任理事国は拡大せず非常任理事国 10 か国拡大することを提案する。議席の配分は既存のものを含めて以下のとおりである: アフリカから 6 カ国、アジア・オセアニアから 5 カ国、ラテンアメリカ・カリブ地域から 4 カ国、西欧・北欧から 3 カ国、東欧から 2 カ国。
- 2: 拒否権の行使をラザリ案にのっとり、国際の平和と安全の維持に関する問題に限定することを推奨する。
- 3: 拒否権を行使する際、慎重な判断を行うことを強く推奨する。

【生徒の感想】

- ・大和会議での反省を生かして積極的に他国への交渉を行うことができました。次の東大寺会議ではこれを生かして自国の利益がきちんと反映されるような立ち回りをしていきたいと思っています。
- ・今回は西大和学園での大和会議を先に経験していたこともあり、比較的先頭に立って会議を進めていたのではないのかと思います。ですが次回からは周りの子も慣れてくると思うので、油断せずに頑張っていきたいです。

【講評】

《良かった点》

- ・全員が模擬国連のルールを学びながら積極的に会議に参加し、非公式会議の場では多くの生徒が意欲的に発言していた。自らの発言が会議を作る、ということを実感できたと思う。
- ・会議後も模擬国連に対する関心を持ち続ける者が多く、2月に行われる東大寺学園の模擬国連大会に本ゼミから8名が参加することになった。

## 2) Technological (科学技術的分野)

### 【意義・ねらい】

高1のTechnologicalゼミでは、日常の生活を豊かにしてきた「もの・サービス」から、それを支える科学技術について知見を広げていく活動を行った。そこから、その科学技術が、現代社会における課題に対してどのようにアプローチすることができるかを、さまざまな観点から考察し、具体的・実践的な解決方法の提案する素地を養うことを目的とした。

### 【授業の流れ】

	回	内容	生徒の動き
基礎	1回目	「科学技術」について	ガイダンス。科学技術のもたらす影響についての分析。
	2回目	既存の技術の分析とその応用例	既存の科学技術とその応用についての考察。
	3回目	発表・質疑応答	既存の科学技術とその応用の発表と質疑応答。
ゼミ	4回目	班決め	SDGsの目標をもと5班(4~5人)に班決め。
	5回目	事例研究①	企業によるSDGs取り組み事例を分析。
	6回目	事例研究②	企業によるSDGs取り組み事例を分析。
	7回目	内容の検討①	グループごとに発表する内容を検討。
	8回目	内容の検討②	グループごとに発表する内容を検討。
	9回目	発表	グループごとの発表と質疑応答。
	10回目	内容の再検討	他のグループの意見などを参考に、内容の再検討。
	11回目	課題決定	企業をひとつにしぼり、その企業で活かせるであろう科学技術を調査。その上で、テーマに沿って班を再構築。
	12回目	課題探求①	グループごとにそれぞれの課題を検討。
	13回目	課題探求②	グループごとにそれぞれの課題を検討。
	14回目	発表	グループごとの発表と質疑応答。
	15回目	内容の再検討	他のグループの意見などを参考に、内容の再検討。



### 【生徒の感想】

- ・技術について発表するときは絵や写真を用いる方が、わかりやすいと思った。話すだけでは理解するのが難しいし、聞いているうちにどんな技術かわからなくなるので、一回で理解できるようにどんな技術かのスライドは必要だと思った。
- ・考えた案が白紙になることもあって苦労しましたが、その度に、先生のアドバイスも頂きつつ、チームでさらに熟考を重ねた結果、より良いアイデアを出すことができました。
- ・地球環境について考えましたが、なかなか良い案が生まれず、苦労しました。しかし、最終的にはチームで意見を出し合い、まとめることができ、形に持っていくことが出来ました。
- ・高校の理科の範囲を大幅に超えた分野の研究や調査をするので、大学受験よりも企業に就職した後によく使うであろう知識を身につけることができた。
- ・何かを研究してそれを人の前で発表することはとても難しく、そのような発表の練習を高校生のうちからできるので、社会に出てから有利になると思う。

### 【生徒の作品】



### 【講評】

ゼミ活動を通して、現在用いられている科学技術が、国境を越えて、様々な分野で利用できるように着目できる生徒が徐々に増加していると感じている。この気付きから、科学技術に対する理解をさらに深めさせたい。そして、さらなる科学技術の発展に寄与するために、世界を視野にいれて活躍する多くの企業の調査を行い、科学技術がそれらの企業の事業にどのように応用できるかを考察させていきたい。

Technology は我々の生活の至るところに見られ、それなくしては生活できないほど身近なものであるが、いざ研究課題として取り組むと、専門的な知識が必要になったり、慎重で深い考察を加えねばならなかったりと、様々な困難に直面することが多かった。それも関わらず生徒たちは、彼らなりの柔軟な視点をもって、前向きに課題に取り組んでくれたように思う。今年度からは、本校にとって必要不可欠な南海電鉄との連携学習という初の試みもあり、今以上の知的好奇心・探究心をもって、課題に取り組んでいてもらいたい。

3) Economic (経済的分野)

【意義・ねらい】

- ・社会的課題、グローバル 이슈という観点から経済を考える。
- ・業界研究、企業研究を通して企業活動や技術の動向を知る。
- ・日経ストックリーグの参加を通して世界と日本の経済の動きを理解する。→株価変動の背後にある「経済・社会の動き」に関心を持ち、自分たちの生活や社会の変化と経済の関係を知る。



企業活動や技術革新の分析を通して経済の基礎知識を身につけさせ、様々な社会的課題・グローバル 이슈を解決するための発展的な議論が出来る素地を育成することを目標としている。情報を与えるのではなく自ら情報を求めさせる方法として、日経ストックリーグの手法を活用した上で、株式学習ゲームを利用してポートフォリオの作成を行う。企業への投資行動により、企業活動、保有技術、社会的貢献への取り組みといったミクロな視点を養うことが期待できる。また、株価変動は内外の経済・政治など様々な影響をうけるため、マクロな視点を養うことが期待できる。

【授業の流れ】

基礎	1回目	発表する入賞レポートを決定	ゼミ	4回目	テーマの発表
	2回目	発表の準備		5回目	企業の洗い出し
	3回目	発表(1班5分)		6~8回目	スクリーニング作業
ゼミ	1回目	チーム編成・テーマの検討	ゼミ	9~11回目	レポート作成
	2・3回目	テーマ検討		12回目	発表

基礎ではストックリーグの入賞レポートの研究を行った。テーマの決定はどのように行ったのか、ポートフォリオとテーマの関係はどうか、レポートの独自色はあるのかなど、レポートを書いていく上で大切な点を分析させ、発表させた。ゼミに入って、まずテーマの設定を行った。テーマに関してはこれからの成長分野や諸課題に関するものを選ばせた。テーマに関係する企業は日経社情報や企業のホームページから情報収集を行った。

【生徒の感想】

- ・今まで全員で会社を調べていたけど、ある程度数が調べられたので一人はそのまま作業を続けて、残りの二人で付箋に書いていくことにした。付箋に書いて見える化したら、たくさん調べたと思っていたのにまだまだ全然足りないことが分かった。スクリーニングのためにも、もっと会社を出さないといけないので他の切り口から調べないといけないと思った。
- ・パワーポイントにいくつか行き届いていないところがあったのが惜しい。投票で選ばれたプラスチック班の発表は、パワーポイントのアニメーションが派手すぎず、分かりやすかった。また、太陽光発電班は自分たちがテーマについての理解を深めようとする自主性が見受けられた。株は今まで実際に売買したことがなく、どことなく近寄りたイメージを持っていたが、ストックリーグに参加したことで、より興味を持った。
- ・再生可能エネルギーや株について深く知れたし、チームで1つのことを頑張ることで協調性の大切さも学びました。レポートに伝えたいことをまとめて、書くことも難しかったですが楽しかったです。

【生徒作品・成果物(ポートフォリオ)】

○企業のイノベーション

消費者の潜在的な欲求に応え、他社と明白な差のつく製品やサービス、市場の開拓を意識的かつ積極的に行うこと

日本の未来を創造する企業に投資

外国人×Technology

銘柄コード	企業名	購入金額(円)	株価(円)
7751	キヤノン	394191	7.5
9433	KDDI	394191	7.9
8752	パナソニック	352697	7.1
8758	ソニー	352697	7.1
6902	デンソー	352697	7.1
7267	ホンダ	311203	6.2
6508	三菱電機	311203	6.2
9434	ソフトバンク	311203	6.2
9432	NTT	311203	6.2
9708	常電ホールディング	290456	5.8
9437	NTTドコモ	269710	5.4
7201	日産自動車	269710	5.4
7259	アイシン精機	269710	5.4
6971	京セラ	269710	5.4
4755	富士通	269710	5.4
9984	ソフトバンクグループ	269710	5.4

中学生が商店街を救う!!  
商店街の新しいカタチ

企業名	予定 投資額	現在の 総額	投資した株数	投資額
8338 日産	310,000	5,309	236	308,924
1932 人とハウス工業	330,000	3,400	94	319,000
2709 日本マクドナルド	310,000	5,365	87	305,500
8741 HPCI	310,000	2,557	121	309,397
8801 三井不動産	320,000	2,883	119	319,513
9142 株式会社アイン	310,000	2,637	117	308,529
9430 KDDI	310,000	3,191	87	309,527
9500 総合電力	310,000	1,184	245	309,680
9936 東電エナジー	310,000	6,870	47	308,790
1419 ツマホーム	330,000	1,763	181	319,103
7182 山崎製パン	310,000	344	951	309,944
8419 エーエル	310,000	2,973	157	307,411
8356 三洋電機	310,000	1,588	537	309,613
9044 南海電気鉄道	310,000	3,010	102	307,020
9434 ソフトバンク	310,000	1,489	211	309,959
ポートフォリオの運用総額				4,662,232
日経平均				234227

【講評】

《良かった点》

- ・テーマ選定において、身近な問題を取りあげながら、研究意義を見出すように指導した。問題に対して、どのような問題なのか、なぜ、この問題を解決する必要があるのか、という問いに答えられないと課題研究の意義が薄れてしまう。生徒たちはテーマについてよく調べ、聞き取り調査なども行った。テーマについて論理的に説明することができ、納得のいく説明ができるようになった。
- 《反省点》
- ・例年よりも時間が十分にあったため、かえって計画が甘くなった。レポートの提出期限には間に合ったが、せつかくの調査などを生かし切れないレポートになった。中間発表では素晴らしい発表であったが、その内容がレポートにすべて書かれていないため、入賞できなかった。

再生可能エネルギーを身近に

銘柄コード	銘柄名	主要市場	10/1株数	購入株数	購入額(円)	株価(円)
1901	大日本印刷	東証1部	4239	64	269600	6.3
1907	人件財	東証1部	1194	249	269916	6.6
2025	大和ハウス工業	東証1部	3645	76	269490	6.6
1042	東映工業	東証1部	949	279	272351	6.6
4104	新電工	東証1部	2845	95	272275	6.6
4063	住友化学工業	東証1部	11430	23	267400	6.5
4204	慶応化学工業	東証1部	1093	160	273860	6.6
4739	伊藤忠テクノソリューションズ	東証1部	2995	93	269235	6.6
1902	三井物産工業	東証1部	2995	104	269460	6.6
6307	住友化学工業	東証1部	3151	86	272330	6.6
6448	アサヒグループ工業	東証1部	1892	136	272912	6.6
6504	富士電機	東証1部	5310	82	271420	6.6
8641	日新電機	東証1部	1305	205	270401	6.6
6155	パナソニック	東証1部	48815	205	270262.5	6.6
8603	住友化学工業	東証1部	2928	120	269760	6.6
8602	丸紅	東証1部	7184	376	270128.4	6.6
8691	オリエント	東証1部	14185	187	270289.5	6.6
9984	ソフトバンクグループ	東証1部	4390	83	269540	6.6
	合計				4692499.4	100.2

PLASTIC REDUCTION

会社名	株式コード	区分	C株	取得株数	取得価(円)
ナシバ	4023	ア	9	40	1
三井物産化学	4182	ア	10	34	3
パナソニック	4410	ア	11	34	4
三洋電機工業	4491	ア	13.5	33	3
大日本印刷株式会社 (DNP)	7912	ア	10	33	4
三洋化学	4183	ア	9	33	4
国産紙パルプ商事	9274	イ	9	41	2
豊田	3401	イ	12	39	1
豊田通商	8015	イウ	9	36	3
コーヨー	4922	イ	10	36	3
Cathay Pacific	7332	イ	9	36	7
大塚製薬	1869	イ	11	35	4
七電機	8224	イ	10	34	4
三洋化学工業	4471	ア	13.5	33	5
ア	2914	ウ	22.5	46	1
島高野	7453	ウ	11	41	3
住友化学	4005	ウ	14	39	2
豊田	3401	ウ	12	39	4
平和堂	8276	ウ	10	39	5
豊田通商	8015	イウ	9	36	6

saikoのおんがく

銘柄(コード)	株式市場	購入額	割合
ヤマハ (7851)	東証1部	620000	12.4
スクウェア・エニックス (8064)	東証1部	615000	12.3
任天堂 (7974)	東証1部	590000	11.8
アモーリス (4301)	東証1部	550000	11
オリエント (4600)	東証1部	550000	11
セガサミーホールディングス (6491)	東証1部	530000	10.6
ALSON (2031)	東証1部	520000	10.4
松竹	東証1部	505000	10.1
ソフトバンク (9984)	東証1部	500000	10
		4900000	99.6



## 4) Societal (社会学的分野)

## 【意義・ねらい】

- ◎文化・家族・医療・都市・職業に関する社会の諸問題を知り、仮説をたて、インタビュー・アンケート調査を実施し、そこから得たデータをもとに、仮説を検証し、自分なりに現代社会やこれからの社会を解釈・予測して、新たな情報として発信する。
- ・現代社会の諸問題を共有する。
  - ・理論仮説をデータで検証するという思考方法を実践する。
  - ・インタビューの基本を学び、実践する。
  - ・インタビューを通し、学校外の人とも意思疎通する。
  - ・アンケート実施の基本を学び、実践する。
  - ・データを、表計算ソフトを用いて統計処理する。
  - ・一次情報を作成する。

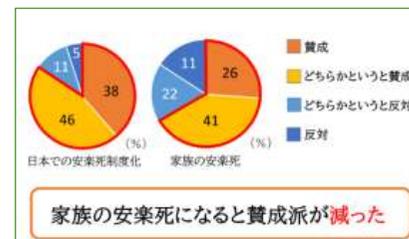
## 【授業の流れ(基礎ゼミ・前半)】

	回	内容	生徒の動き
基礎	1回目	「社会学」について	ガイダンス。社会学の視点から映画を分析する。
	2回目	仮説の設定	「理系・文系選択」の要因を考え、仮説を立てる。
	3回目	仮説と研究見取図	「理系・文系選択」の研究見取図を考える。
	4回目	発表・質疑応答	「理系・文系選択」を研究見取図の発表と質疑応答。
ゼミ	5回目	チーム決め	「文化」「家族」「医療」「都市」「仕事」のチームに分ける。(2～5人のチーム)
	6・7回目	仮説・リサーチクエッションの設定	各チーム、先行研究を読みながら、仮説とリサーチクエッションを設定する。
	8回目	仮説・リサーチクエッションの発表・質疑応答	発表し、意見を交換する。
	9・10・11回目	アンケートフォーム・調査準備・実施	調査対象、調査方法を決定し、アンケートフォームを作り、アンケートを実施する。
	12・13・14回目	アンケート分析・考察	アンケートを統計分析し、考察する。(・信頼度・クロス集計・度数分布・相関)
	15回目	アンケート結果・考察の発表	発表し、意見を交換し、論文の下準備をする。

## 【授業時のP P及び生徒作品(研究タイトル)】

- ・文化への関心をひきだすもの—家庭環境と読書・美術鑑賞の関係
- ・高校生大学生のライフスタイルと恋愛・結婚観—熱心さによりグループ化される若者たち
- ・死生観と医療行為—生命を身近に感じる体験と安楽死・臓器移植・出生前診断への意思の相関
- ・人口が減少する都市の二・三代同居と地域コミュニティの必要性—大阪府高石市の子育てを例に
- ・高校生の職業選択意識と就職活動生の意識—ジェンダーをふまえて

## 「死生観と医療行為—安楽死への意思を左右するもの」発表資料



## Q2.日本で安楽死が制度化された場合、患者が「安楽死」を望んだらどう感じますか？

正直、その場にはいたくない。けど、日本で安楽死が認められているなら患者の意思に従います。



## 【生徒の感想】

- ・納得できないもの、理解の出来ないものについて、答えばかりを追い求めずに思考するのは大変で、しんどいものだ。しかし、多数の人が納得できている答えよりも、その答えに納得できない一人の疑問を明確にし、共有することが必要だと考える。
- ・早く結果を出し、安心したいがあまりに、牽強付会の論を推し進めてしまうことがある。自分の感じていることと、その説明がずれているのではないか。それらの不安を持った状態を大切にできるか、その不安の中思考できるかが、仮説が生まれるか、ひいては、真の思考ができるかの分かれ道である。
- ・私たちは「クールジャパン」から着想される、アニメや漫画を好む中高生と日本文化や美術に興味を持つ中高生の違いについて研究を行いました。研究を行うにあたって、アンケートを取り、分析をしました。アンケートを分析して関連性を見出すというのは、容易ではなく、様々な可能性と観点から物事を見るが必要になり、今後の人生に役立つであろう今までにない経験をすることができました。また、文化というのは解釈が人によって異なる概念である為、定義づけが難しく、大変苦労しました。結果の見えない研究は心身ともに気疲れするもので、何度も悩み、苦しい思いをしましたが、今後の自分の自信になる貴重な財産になったと深く思います。

## 【講評】

ゼミメンバーの、「家の蔵書数、読み聞かせ、幼少期の本を買い与える頻度といった家庭環境のうち、中高生の読書習慣に影響を与えているものはなにか」、「祖父母と接する頻度と安楽死への考え方には相関があるか」、「『近所の人と子育てをする』というのは、親にとって現実的な子育てプランなのか」といった課題は、社会に関心をむけ、メディア情報を読みとり、さらに、自分たちの生活感覚を信じたり疑ったりしながら、仮説をたて、検証するという、丹念な思考の手順を通して発見された。彼らの忍耐強い思考と、社会に貢献しうる課題を発見した底力には驚かされた。

また、ゼミメンバーは、アンケートやインタビューを通して、学校外の人からの助けを積極的に得ていた。正木美術館の学芸員さん、堺市立榎小学校六年生や教員の皆さん、高石市役所の住宅課・子育て支援課の皆さん、京都大学、奈良女子大学、大阪大学、神戸大学の学生さんたち、医療関係職の方である。他者の知見に敬意をもち、問題を共有し、他者から学びとったことをもとに自身で思考していくことで、社会の現象を独自の視点で解釈し、問題解決策を試みる、真摯な姿勢が見られた。

## ③1年 Global English (グローバル・イングリッシュ)

## 【意義・ねらい】

プレゼンテーションを行うことを本コースの中心的な活動とする。プレゼンテーションの実施とその振り返りを通して、良いプレゼンテーションに求められる基本的な要素についての理解を深めさせる。効果的なプレゼンテーションを行うために、様々な観点から物事を考えることを学ばせる。このコースでは、通常のエッセイの授業で学習している知識を活用させ、結果として、スピーキング能力だけでなく、ライティングの能力も高めることを意図している。

## 【生徒に求められる力】

このコースを通して、生徒は以下の力を高めることが求められる。

- リサーチ能力
- スキミング・スキヤニングなどを含むリーディング能力
- プレゼンテーション能力
- 思考力 質問・議論する能力 チームワーク



## 【授業の概要】

(構成)

- ① 1クラス(約40名)を約20名ずつのグループに分けて授業を行う。
- ② 各グループに対し、日本人教員1名と外国人教員1名が指導にあたる。
- ③ 授業は基本的に英語で行い、生徒同士も原則的に英語で会話をする。

(内容)

- ① 効果的なプレゼンテーションを行う際には何をどのような順番で伝えるべきなのかを各班で考える。(各班4～5名)
- ② 教員が作成した My favorite thing をテーマにしたプレゼンテーションの原稿を示す。
- ③ 教員が作成したモデル原稿では、何の情報かどのように提示されているかを分析し、①で議論した内容と比較する。
- ④ 自分のプレゼンテーション内容を考え、その原稿を教員に提出する。
- ⑤ 教員からのフィードバックを基に原稿を書き直し、発表の練習をする。(アイコンタクト声の大きさ、ジェスチャーなども意識して練習する)
- ⑥ 各班ごとで、評価シートをもとに評価し合う。また、班員の発表からそれぞれの良い点・悪い点を見つけ、自分のプレゼンテーションに生かす。
- ⑦ 全体の前でプレゼンテーションの発表を行う。その際には Cue Cards を用いて、アイコンタクトやジェスチャーなどを効果的にできるようにする。

## ④1年シナリオ・プランニング講座

## 【意義・ねらい】

高2から始まるシナリオ・プランニングの基礎を学び、スムーズに授業が行えるようにする。

## 【授業の概要】

- ① オリジナルのテキストを作成し、シナリオ・プランニングの理解と簡単な演習を5回行った。
- ② 1チーム6名とし、議論しやすくする。
- ③ 練習として「10年後のコンビニ」「20年後の清風南海高校」のどちらかとテーマにシナリオを作成。

## 【授業計画】

1回目	シナリオ・プランニング(以下 SP)とは。本校が SP を取り入れた理由。身につけた力は。SPの手順。環境分析とドライビング・フォース。STEP 分析の練習。
2回目	環境分析とドライビング・フォース。SWOT 分析の練習。練習として2つテーマに關係するドライビング・フォースの列挙。ドライビング・フォースの根拠となる資料を探す。
3回目	環境分析とドライビング・フォース。2つのテーマに関してでたドライビング・フォースを SWOT 分析で分類。インパクトと不確実性の説明。2つのテーマに関するドライビング・フォースの評価。
4回目	2つの重要な因子の抽出。シナリオの作成。
5回目	シナリオの発表

シナリオ・プランニングは複雑で簡単に理解できるものではないので、解説付きのテキストを作成し、途中で練習問題を挟んで理解が進むようにした。講義のあと、練習問題という、普通教科と同じ手順を踏むことで、SPを理解しやすく工夫した。軸となる重要な因子は外部環境に限るのだが、この判断は難しく、発表のシナリオでも内部環境が軸となっているものがあつた。しかし、5回の授業で作成したシナリオは、資料を調べながら作られたもので、短期間のわりに理解が進んでいたように思えた。以下は2つテーマにおける2つの重要因子をいくつか列挙したものである。

10年後のコンビニ	ドラッグストアの進化×コンビニ無人化 ドローン技術とサービス進化×食料廃棄の減少 食品の冷凍技術とサービスの発展×営業時間の短縮(社会的風潮)
20年後の清風南海	AIの導入×日本の海外からの留学生への補助拡大

## 【生徒の感想】

- ・ドラッグストアという自分たちと同じテーマで SP を行っている、各ドライビングフォースの不確実性に対する考え方が違っていたりすることが面白かった。
- ・他の班のドライビングフォースで冷凍産業や昆虫食など、私の班では全く出なかった話を聞いた。シナリオプランニングは未来の外的要因を考えるのが難しい。軸をとるときにどうしても内的要因に目が向きがちになる。もしかすると、興味のあるテーマだともっと奥深く調べようと思うかもしれない。

④ 1年講演会・特別授業

No.	日程	講師	内容
1	5/22 (水)	関西学院大学 法学部 赤星 聖 助教	「持続可能な開発目標 (SDGs)」をテーマに、国際的な観点をもって物事を俯瞰することの重要性を学ぶ。
2	6/14 (金)	関西学院大学 社会学部 清水裕土教授	「恋愛」というテーマを、社会心理学の視座から考察する。
3	7/12 (金)	関西学院大学 イノベーション研究センター 土井 義之 教授	① 日常の疑問を経済学で考えよう ② エネルギー経済のしくみ～産業内と産業間～ ③ エネルギー経済と経済～経済学の基本的な考え方～ ④ 企業・産業の経済分析の方法について
4	7/23 (火)	滋賀県 琵琶湖環境部 環境政策課 海東 聡氏	① 琵琶湖の価値について ② 琵琶湖における課題と取組の経過 ③ 琵琶湖における取組について ④ 琵琶湖における最新の話題・課題 (全層循環不完全、マイクロプラスチック)
5	11/29 (金)	南海電気鉄道 SDGs 経営推進部 戸田 弘氏 駒田 尚紀氏	「地球環境にどう向き合いますか？」 ① 南海電鉄ってどんな会社？ (取組の紹介) ② 地球環境にどう向き合いますか？ ③ 南海電鉄もこんなことをしています ④ みなさんと未来を考えませんか



<中間発表会>



⑤1年 Field Work (フィールドワーク) 等

No.	日程	場所	講師等	内容
1	7/9 (火)	関西学院大学 西宮上ヶ原 キャンパス	関西学院大学 社会学部 清水裕士 教授	大学生の卒業論文の中間発表、質疑応答に参加した。発表テーマは、「異性間の交際期間を継続させる要因」「衝動購買」「プレゼント」「制御焦点理論を用いた孤独感の低下」「集団パフォーマンス」だった。
2	7/9 (火)	関西学院大学 西宮上ヶ原 キャンパス	法学部 赤星 聖 助教	高校生・大学生混合のグループを作り、様々な政治的諸課題の中から1つのテーマを選び、「文化・政策はどうあるべきか」を考え、議論・発表した。
3	7/23 (火)	産業技術総合研 究所 関西センター	無機機能材料研究部門 堀内 哲也 研究員	「接着面積」 ①接着面積と接着の強固さを考える。実際に木材を用いて模型の椅子を作成。 ②電子顕微鏡などの研究所・設備を見学し日本の最先端の研究・技術に触れる。
4	8/9 (金)	滋賀県高島市	滋賀県琵琶湖環境部 環境政策課 課長補佐 佐藤 勝也氏 滋賀県農政水産部 水産課 主査 関 慎介氏	「琵琶湖に見られる環境問題とその現状を知り、課題への取組方を考える」 ①三和漁港での見学と講義 ②針江地区のカバタ見学 ③ヨシ帯の観察
5	10/24 (木)	大阪大学 豊中キャンパス	大阪大学文学部 門脇 むつみ准教授	「海外の(多くの)国にあるが、日本と海外ではいろいろと事情が異なるもの」 ①グループ(4名か5名)に留学生(1名)というグループ分けで、アイスブレイクの時間をとる。時間が経つと班を移動し、留学生全員と話すようにする。 ②各班で事前学習をした内容を基にディスカッションを行う。 ③上記②を基に、総括として各班が報告、意見の共有をする。
6	12/24 (火)	南海電鉄 千代田工場	南海電気鉄道 SDGs 経営推進部 戸田 弘氏 駒田 尚紀氏 千代田工場 職員の方々	「工場見学を通じて、南海電鉄の環境・エネルギー対策を学ぶ」 ①最新車両の新テクノロジー ②工場における廃棄物処理システム ③工場における環境マネジメント



## 2. 二年生

### ①2年 STEP ゼミ

#### 1) Political (政治学的分野)

##### 【意義・ねらい】

模擬国連では自らの担当する国の課題を探り出し、解決のための決議案を考える。そしてそれが決議となるよう、他の国から理解が得られるよう説明し、折衝する。この取り組みを通して生徒たちは、政治とは「最大多数の最大幸福」を実現するものであると実感し、自国だけの利益にとらわれてはいけないということに気づくはずである。この自己にとらわれず多様性を認める姿勢こそ、生徒たちが政治を学ぶことを通じて身につけるべきものである。



具体的には、①1 名ずつ担当国を決定、②担当国の政治・経済、課題等の調査、③発表準備・練習、④担当国代表として討論、という流れで展開する。

本年の前半は「移民問題」をテーマとし、第1回会議を開催した。後半は、「死刑モラトリアム」について第2回会議を行った。これらの会議参加により、他国への関心、課題発見・解決能力に加え、専門知識の取得（法令等の読解）、プレゼンテーション能力や表現力、交渉力などを養うことをねらいとした。

##### 【授業の流れ】

1 回目		授業ガイダンス、担当国決定、議題発表
2 回目	第1回 会議	議題についてのレクチャー、Position Paper(基礎情報)作成
3 回目		第1回会議(1 日目)
4 回目		第1回会議(2 日目)、決議案作成
5 回目		授業ガイダンス、担当国決定、議題発表
6 回目	第2回 会議	議題についてのレクチャー、Position Paper(基礎情報)作成
7 回目		第1回会議(1 日目)
8 回目		第1回会議(2 日目)、決議案作成



#### 【生徒作品・成果物】

##### ・生徒が作成した決議案の例

Agenda item:
Author: <u>メキシコ</u> Sponsor: <u>シリア、マダガスカル、トルコ、ナイジェリア、オーストラリア、南アフリカ共和国</u>
 <i>The General Assembly,</i>  <i>Preamble Clause starts here, ...</i>
1. 頭脳流出に関して、発展途上国と先進国の双方にとって平等なルールを作る。  (a) 現在、オーストラリアで実施されている移民のポイント制の導入を推奨する。高学歴の移民が発展途上国から過度に流出してしまうことを防ぐために、年齢や語学スキルなどをポイント化し、先進国には高いポイントを持っている移民の受け入れを制限することを求める。  (b) 移民が受け入れ先の国の選択をしやすくし、かつ各国の移民受け入れの現状を目に見える形にするために、移民の受け入れ数の基準を各国でもうけ、公表することを求める

##### 【生徒の感想】

- 決められた担当国の立場になることで、普段とは違う視点で議題について考えられるようになりました。SP などグループで活動することが多い中で、一人で1ヶ国を担当するようなことは珍しいと思いますが、決議案を出すための合意を形成していくため、普段のグループ活動よりもっと多くの人に気を配らなければならないと思いました。
- 今の国際情勢を知れる上、いろんな国の立場に立って、様々な問題を見ることができるので、多面からの考え方を身につけることができるので本当に役に立ちます。
- 会議では一国の大使として意見を述べるので、議題に関してこれまで考えたことなかった立場から考えることができ、以前より多角的に物事を捉えられるようになったと感じます。

##### 【講評】

《良かった点》

- 今会議は、実際の模擬国連大会で使用された議題解説書を用い、国連会議を模擬した。全員が解説書を熟読して、論点を把握し会議に臨むことができていた。
- 授業での取り組みをきっかけに、学校外で行われている模擬国連大会に出場する生徒が出てきた。

生徒が参加した主な模擬国連大会	主催者	開催月
第12回全日本高校模擬国連大会 (書類提出のみ)	グローバルクラスルーム	11月
西大和模擬国連大会	西大和学園高校	12月
合同模擬国連交流会	大谷高校	12月
東大寺模擬国連大会	東大寺学園高校	2月

## 2) Societal (社会学的分野)

### 【意義・ねらい】

社会や人間そのものに対する考察を深める訓練を行う。本年度は、全体の進行を SP 重視に切り替えて実施した。前半は不確実性の検証などに時間を割き、SP の理解を深めることに努めた。全体の回数としては8回と少なく、まとまった時間を確保出来ないため、後半では、より実践的な取組することを重視し、Economic ゼミと協力しながら、ビジネスプランコンテストやキャリア甲子園への出場を推奨した。斬新なアイデアの創出(発散)とエビデンスの収集による実現可能性の確立(収束)という形で思考の運用を体感できたようである。キャリア甲子園はPBL(Project Based Learning)の実際的な大会として多くの参加校があり緊張感を持って取り組めた。

また、キャリア甲子園では実際の企業から現状に即したアクチュアルな課題が提示されており、少し未来を対象としているためシナリオプランニング(SP)を実施する際にも効果があると思われる。

### 【授業の流れ】

1回目	ガイダンス
2回目	DF 不確実性に関する考察
3~4回目	日本政策金融公庫の担当者による講演
5回目	夏休み課題「トレンド分析」についての発表会
6回目	ビジネスプラン提出にむけた最後の発表会
7回目	探究活動の基礎的な手法についての振り返り
8回目	日本政策金融公庫の担当者さまから、作成したビジネスプランへの講評

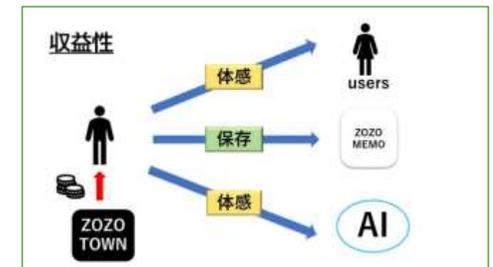
### 【生徒の感想】

- ・トレンドを考えることで SP をする上で知識が少しつき、実際に話し合いの場でその知識が活用できた時、とても嬉しかったです。あまり S としての活動はありませんでしたが、キャリア甲子園もあるので、まだまだ頑張りたいと思います。
- ・SP の印象が強すぎてあまり S をやっていた感覚がありませんが、夏休みに自分で決めたテーマに関する本を読み、夏休み明けに発表をしました。僕は自分が好きな、ネットに関するテーマにしたので、とても楽しく挑むことができました。
- ・自分の興味のあったトレンドを調べることができました。また、ほかの人が調べたトレンドについてのことも知ることができ、多くのことを学びました。
- ・企業からのテーマに沿ったサービスを提案しなければならないため、相手が何を求めているかを考える力が付いたと思います。また、その過程で、企業の分析及びテーマの分析が必ず必要となってきます。そのため、分析力も向上したと思っています。
- ・考え抜く力を得ることができたと思います。アイデアに余事象がないか、テーマのこのフレーズはどんな意味が込められているのか、どうすれば企業、自分たち社会、業界、の全てにおいてメリットが得ることのできるいいプランに仕上げることができるかなど、一つ一つ考えることができました。

また準決勝進出をすることができたため全国から集まったプランを見ることができ、同じテーマでもこんな解釈があるのかという刺激を受けることができました。勝つことにこだわるといことを初めて実感し自分に良い負荷をかけることができたと思っています。

- ・思考力が向上したと思う…テーマ分析では、その言葉に隠れている企業さんが「求めているもの」を読み取らなければならないし、自分たちのアイデアが本当にそれを満たしているか何度も考えないといけない。そしてプレゼンではそのことが誤解なく相手に伝わるようにしないといけない。初めから最後までとにかくとことん追求することが大事だと改めて感じました。
- ・企業さん相手にプレゼンできたこと…校内でのプレゼントはまた少し違ったものが求められ、「発表」のプレゼンと「提案」のプレゼンの違いを感じた。これを通して、社会の中での自身の位置を感じることもなった。

### 【生徒作品・成果物】



	1日目	2日目	3日目	4日目
6:30		始業	始業	始業
7:00				
8:00		始業	始業	始業
9:00				
10:00	集合	パラ体験	パラ体験	運動会役員
11:00	レクリエーション			
12:00	昼食	昼食	昼食	運動会
13:00		パラ体験	パラ体験	
14:00	レクリエーション (自然交流活動)			
15:00				
16:00	パラの研修など	運動会内容決め会	運動会内容決め会	片づけ
17:00				
18:00				お別れ会
19:00	夕食	夕食	夕食	解散
20:00	お風呂	お風呂	お風呂	
21:00				キャンパスファイナル
22:00	消灯	消灯	消灯	



### 【講評】

社会学という領域の曖昧な学問を教えるにあたり、曖昧さ故の評価基準の不明瞭さを回避するため、外部コンテストへの参加を試みた。結果として審査結果が客観的な第三者によって与えられることになり生徒にとっては刺激になったと思われる。

また、未来を予測してのビジネスプランの創出は SP や統計資料の扱いを鍛えるにも適切であったと考える。昨年に引き続き準決勝大会に7チームが残り、東京に行くことになった。これは全国でも類を見ない実績であり、後輩達の励みにもなるものであると考えられる。その多くが他のゼミとの混成チームであり、また、グローバルコース以外の生徒との混成チームも増えている。学校として、主体性を育てるための活動としてグローバルコースが設立されたが、このコースを起点とした影響が学校全体に広がっていったことは嬉しい流れである。また、関東の学校との交流が持てた・点でも良かったのではないかと評価している。

### 3) Economic (経済的分野)

#### 【意義・ねらい】

経済と一口にいっても、経済政策や企業行動、金融政策や株・為替などその対象は様々である。SPにつながる経済の知識を身につけさせるとともに、グローバルリーダーとしての資質や実際の進路選択にもつながる活動を考えた。その手段として、日本政策金融公庫が主催している高校生ビジネスプラングランプリを用いた。高校生ビジネスプラングランプリは、高校生が社会課題を発見し、その社会課題を解決するためのビジネスプランを作成するコンテストである。様々な社会的な問題をテーマにし、多種多様な企業の活動を研究しながら自らのビジネスプランを作成することで、経済に関する幅広い知識を身につけることができると考えた。

#### 【授業の流れ】

1回目	ガイダンス、チーム結成
2回目	過去の入賞作品の分析
3回目	日本政策金融公庫担当者による「ビジネスプラン作成のコツ」講座①
4回目	日本政策金融公庫担当者による「ビジネスプラン作成のコツ」講座②
5回目	ビジネスプラン発表会1回目
6回目	ビジネスプラン発表会2回目
7回目	作成したビジネスプランの振り返り
8回目	日本政策金融公庫の担当者より、作成したビジネスプランの講評をいただく

#### 【生徒の感想】

- ・今回プランを作成してみて、何か物を作るということはこんなにも大変なんだということを身に染みて感じました。僕は将来実際に起業してみたいと考えていて、今回の活動は大変ではあったものとても有意義で楽しい時間でした。この経験を将来にも生かせるようこれからも精進努力します。
- ・今回の過程を通して、やはり試行錯誤は大事だな、と改めて思いました。何度もやらなければ何が間違っているのかもわからないし、ゴールも定まりにくくなりがちでした。そして何よりも今の世の中、情報社会といわれるようになるだけあって、自分にはあまりにも知識が少ないんだと痛感しました。自分の夢はたくさんの人と会話し、コミュニティを広げることです。そのために自分に必要なものは何か吟味し、それらをものにできるような人になりたいです。
- ・今回、ビジネスプラン・グランプリを通してとても有意義な時間を過ごせたと感じています。私たちだけではなくほとんどの高校生は将来ビジネスというものにかかわるものだと思うので、こういう形で先行してビジネスについて考える機会をいただくことができたことに満足しています。今後もこの貴重な経験をいかして励んでいきたいと思えます。

#### 【課題研究のテーマ】

マイクロプラスチックなどの環境問題・食の安全・待機児童問題・超高齢化社会への対応など

#### 【生徒作品・成果物、取り組みの様子】



#### 【講評】

##### 《良かった点》

- ・一年を通してエコノミックで取り組むことを、ビジネスプラングランプリに絞ったため、一回一回の活動の中身が濃い活動を行うことができた。
- ・生徒同士でプランについて話し合うことで自分の意見を持つことの大切さに気付いた生徒が増えた。
- ・自分の意見を持つだけでなく、相手の意見をきちんと受け入れ、自分の考えの至らない点を素直に受け入れ、改善点を考えることができるようになった。

##### 《反省点》

- ・提出間際になり、課題を完成させようとするのがあった。
- ・後半は、エコノミック独自の活動を行うことができなかった。



## 4) Technological (科学技術的分野)

## 【意義・ねらい】

現在の世界が抱える環境問題について幅広い知見を身につける。特に生態系とエネルギーに関する問題は世界が早期に解決しなければならない。そこで、生態系に関する問題では外来生物や水質保全について、エネルギーに関する問題では化石燃料に代わるクリーンなエネルギーについて学ぶことにした。環境問題を科学的・技術的な視点から理解を深めることで、10～20年後に起こりうる未来を予測する。その際、それぞれの技術が持つ現時点での限界についても考えることで、環境保全やエネルギー生産について自ら課題を発見し、解決するための最善策を提案できるようにする。

## 【授業の流れ】

1回目	ガイダンス、班分け
2回目	実験内容の決定
3回目	学会発表に向けた準備(1回目)
4回目	学会発表に向けた準備(2回目)
5回目	実験条件の検討
6回目	発表を終えた反省会
7回目	小水力発電の現状と問題点について
8回目	改めて日本の電力問題について考える

次世代のエネルギーとして、太陽光発電、地熱発電、小水力発電についてそれぞれの仕組みと利点、問題点について学習した。現在、太陽光発電は知られており実用化しているが、地熱発電と小水力発電は開発段階で大規模な実用化にはまだ時間がかかる。特に、小水力発電とは用水路や小河川など利用して発電する方法で、大規模なダム建設を必要とせず、環境への負荷も少ないので、日本の国土事情を考えると適した発電方法かもしれない。最終回では、日本の原子力発電について改めて議論を深めてみた。扱いにくい内容であり、難しい問題であるが避けて通ることのできない問題でもある。

## 【日本エネルギー環境教育学会 第14回全国大会(高知大会)での発表】

日頃の取り組みの成果を発表する場として高校生が発表できる学会を選んだ。コンテストとして競う場ではないが、他校の生徒や先生方さらに専門家との交流の場とするとともにアカデミックな雰囲気を味わう機会となった。



<学会発表当日の様子>

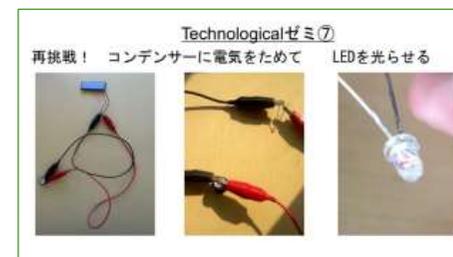


## 【生徒作品・成果物】

①



②



③



④



## 【生徒の感想】

- ・テクノロジカルゼミでは、主にエネルギーを取り扱い、具体的には、エネルギーについてインターネットで調べ、エネルギーの観点から今後の日本社会がどのようになっていくかを考えました。これは、シナリオ・プランニングにも通ずる経験であったのでグローバル活動に非常に役立ったと思います。
- ・日本の現在の発電状況を理解した上で、全員で学会に向けての準備などをしました。基本的に生徒の自主的な行動を尊重して下さっているので、自分たちの好きなようにのびのびとでき満足しています。
- ・太陽光発電などいろいろな発電を自分たちで調べたりそれについて考えたりしましたが、なかなか積極的に外部の大会に参加できずに終わってしまいました。テクノロジカルゼミで身につけた知識は少しでも国際シンポジウムのSPに活かせればと思っています。

## 【講評】

## 《良かった点》

- ・学会発表を目指すことで、積極的に取り組む生徒が増えた。
- ・実験の設計を自ら行うことで、論理的に考えるようになった。
- ・難しいテーマを扱ったが、真剣に調べたり考えたりした。日常の中で意識しない問題に気づいた。
- ・生徒同士で議論ができ、考えをしっかりと持つ生徒が増えた。
- ・人の意見を聞く姿勢が大きく成長した。特に、相手の意見を尊重できるようになった。

## 《反省点》

- ・全員が実験をしたわけではなく、希望者だけとなってしまった。
- ・後半は実施回数が少なく、まとまった活動ができなかった。
- ・生徒主体の活動を増やすべきだった。

## ②シナリオ・プランニング(SP)

## 【意義・ねらい】

シナリオ・プランニング(以下 SP)の手法を学び、この SP を用いて、課題解決学習につなげていく。この活動では SP はあくまでも手段であって、SP を学ぶことを目的としていない。課題解決学習の方法は様々あるが、ビジネス手法を応用する例は少ないであろう。SP は未来のことを考え、それに対応する方法を考えるための手法である。グローバルリーダーの資質として、現状の課題解決のみならず、将来のことを見据えて物事を考え、行動できることが求められる。これらの活動を通して、課題設定力・論理的思考力・資料分析能力・批判的思考力などを養うことを目的としている。そのため、今年度はシナリオを作成する「主体者」を明確にし、シナリオに対する対応策や戦略も考えさせている。

## 【授業の流れ】

1 回目	ガイダンス、プレ SP の班分け発表
2～4 回目	プレ SP (ドライビングフォース列挙、二軸決定、シナリオ作成、発表会)
5～7 回目	SP の班決め、個人 SP (準備、発表会)
8～10 回目	SP (ベースシナリオ説明、決定、発表)
11～12 回目	SP (ドライビングフォース列挙、二軸決定)
13～14 回目	SP (校内発表会の準備)
15 回目	SP (校内発表会)
16～18 回目	国際シンポジウムの発表準備
19 回目	国際シンポジウム反省会
20～25 回目	卒論作成(班共通部分作成)
26～28 回目	卒論作成(個人論述部分作成)
29～30 回目	卒論作成 手直し
31～32 回目	卒論作成 英語要約
33～35 回目	中間発表会準備

## 【生徒の感想】

- ・今までのグローバル活動の中で最も難しく疲れるものでした。1 番難しかったのはどちらかの軸に偏らずに各象限で起こるもののタイトルと内容を考えるという 1 番のメインのところ。難しかった分得られたものも大きいと思うのでこれからの生活、将来に役立てていきたいと思えます。
- ・SP で未来を予測することの難しさと大切さを学びました。発表の最後の瞬間までもっとよくできないか、見落としはないかと吟味を重ねていました。今回の経験を色々な物事に活用していきたいです。チームの力がなくて一人ではここまでこれなかったと振り返って強く思います。仲間と一緒に頑張れたと思います。
- ・「答えのない問題」を自ら作り出し、それを解決するための方法を見つけ出すという高度なことを高校生の間に来たことは将来の糧になると思う。

- ・最初はカタカナ語が多くてとっつきにくかったですが、やるにつれて理解が深まった。思考力も高まったと感じられた。
- ・未だにスムーズにシナリオを作ることができていません。SP は答えのないことについて考えるものであるためスムーズに出来ること自体少ないのかもしれませんが、実際今回の SP も試行錯誤の連続でした。発表の一週間前くらいにこれまで考えてきたテーマを変えて新しいテーマにしました。班のメンバーはみんなが必死で頑張ったのでその成果もあり壇上に選ばれたときはすごくうれしかったです。

## 【生徒作品・成果物】



## 【講評】

## 《良かった点》

- ・いろいろな先生方と相談しながら進めるように指導したので、疑問点の解決や方向性の修正がスムーズに行えた。また、情報の収集や分析に積極的に取り組むことができた。
- ・数回に分けて段階を踏むことで、生徒はその時々にするべきことがわかり集中できた。
- ・SP の班を生徒自身に決めさせたので、各自が自覚を持ち積極的に取り組んだ。

## 《反省点》

- ・議論すればするほど新しい意見や考え方が出てくる班があった。前向きな取り組みなので良いことだが、軸の取り直しから始めるなどかなりの時間がかかった。
- ・時間が限られているので、できることとそうでないことを分けて進めていかなければならなかった。

### ③2年 Global English (グローバル・イングリッシュ)

#### 【Course Mission Statement】

Giving presentations is an integral part of the activities that students on the Global course are expected to be able to perform. In this course, students will learn how to introduce various aspects of Japanese culture in an engaging way to an audience abroad, and by doing so contribute to a meaningful cultural exchange. In order to do so, the students have to gain the flexibility to switch perspectives; they will practice to shift between their own Japanese perspective and the perspective of their foreign audience, which is not familiar with Japanese culture. In the process, students will also practice analytical thinking skills that will help them design effective presentations.

#### 【Required Academic skills】

Students will be exposed to and expected to practice the following academic skills.

- > Effective research skills (E.g. identifying valid resource material)
- > Effective reading in relation to sourcing research content  
(E.g. skimming, scanning, academic article approach)
- > Effective presentation skills
- > Effective thinking skills
- > Effective questioning skills
- > Effective discussion skills
- > Teamwork



#### 【GE 高2時の目標】

高1時のGEでは英語でのプレゼンテーションに重きを置いて能力を開発してきた。それを踏まえ、より実践的な活動に向けた準備や練習をするのが、高2時でのGEの目標である。高2前半では7月末に行われたオーストラリア・パースでの修学旅行に向けた事前学習と現地校でのプレゼンテーション、アクティビティの準備と練習を行った。

高2後半のGEでは、国際シンポジウムに向け、自分たちが今行っているシナリオ・プランニング(以下 SP)を英語で説明し、質疑応答できるようになるというのを最終目標に準備・練習している。高1時3月には海外フィールドワークにおいて、実践での英語でのプレゼンテーションはすでに経験しているが、自分たちが普段のグローバルの授業で取り組んでいる SP を英語で説明するという、より高度な内容になっている。日本語でも大変な SP の高度な内容をそれに対する予備知識を持たない人に説明することは英語の力だけでなく、自分たちを客観視する能力、物事を俯瞰して捉える能力も必要とされる。日本語では深い思考が可能であっても、第2言語での深い思考は、相当な訓練と慣れが必要である。生徒にとって、SP のディスカッションを英語で行うには、頭の中で日本語を整理して英語に訳しなおすことが精一杯であろう。それを即興の英語で対処できるようになるには、まだまだ練習が必要である。



<オーストラリア修学旅行でのプレゼンテーションやまとめ発表の様子>



During the first year for the global course we focused on increasing the students' ability to give presentations in order to prepare them for their fieldwork trips in March 2019. Following on from this, the goal of the first half of the second-year global course was to build on the students' experiences during their fieldwork excursions, and to prepare the students for a trip to Perth, Australia in July. While in Perth the students visited local schools where they taught the local students various Japanese games and activities, as well as giving presentations. As this was all carried out in English, the students spent their time during Global classes practicing how to give specific instructions in English. They also further refined their English presentation skills through various group and individual presentation activities.

The second half of the year was dedicated to preparing the students for the International Symposium, and scenario planning, or 'SP' for short. After first creating their scenarios in Japanese, the students are required to make presentations in English. Scenario planning is a difficult concept for the students to grasp in Japanese, so asking them to also do it in English really requires a deep understanding of how English can be used in conjunction with Japanese. Scenario planning requires the students to think on a deeper level, taking students out of their comfort zone and forcing them to really consider how best to utilize English as a tool for international communication and understanding. Therefore, scenario planning can certainly be said to be of great value to students who will soon be members of an increasingly global society,

## 3. 三年生

## 卒業論文制作

## 【意義・ねらい】

高校三年間のグローバルコースの活動の集大成として、これまで行ったシナリオ・プランニング(SP)を卒業作品集としてまとめている。これまで授業の中で行ってきた発表を受け、完成に向けて執筆に入った。注釈については脚注を採用するような形で本文と注の対応関係を重視した。また、脚注を採用したことで細かな補足を行えるようになった。

大部になることもあり、今後も見やすい紙面になるよう改善は必要だろう。

## 【制作の流れ】

## ① 国際シンポジウムでの発表を受けての反省点の洗い出し

基本的に、高校二年の秋に開催された国際シンポジウムにおいて、ポスターもしくは舞台上のパワーポイントで発表したSPの内容をブラッシュアップしたものを卒業作品とする。しかし、シンポジウムの時点で納得の出来ていない班や、致命的な論の瑕疵が見つかった班などもあり、材料を活かしながら再度一からSPを練り直すという班が多くあった。結果として作業の進捗については班によってかなりの差が出ることとなった。

## ② 「卒業作品集」の構成の説明。

あらかじめ論文冊子の構成については生徒に案内してあったが、書式については一部指示通りに行えていない班もあり調整に手間取った。

また、論文という形式そのものに慣れていないということもあり、昨年度の冊子、脚注を使用した論文をサンプルとして提示し、作業がなるべく円滑に進むように心がけた。

## ③ 班内共通部分の執筆

各班のトピックについて、中心となる議論は共通部分とした。それまでに議論を重ねてきたこともあり、話し合いながら書き進めるといよりも、担当を分配して執筆するという班が多かった。

## ④ 個別論述部分の執筆

概要ができあがった後は、個人が班のトピックに絡めて問題提起を行い、自由に論じることとした。書きやすい象限に固まってしまうのをもう少し注意すべきであった。

## ⑤ 全作品の集約

〆切を設けて、全班の共通部分と、全員の個別論述部分を集め、仮組みを行った。その際、脚注のナンバリングや出典等の記載方法についてチェックを行い、再度修正を指示した。

## ⑥ 英語によるサマリーの執筆

各班の共通部分を、各班の英語係が、要約して英語のサマリーを執筆した。最終的には英語科教員およびネイティブ教員のチェックを受け、完成とした。

## グローバルコース 「卒業論文(仮)」の構成

## 【はじめに】 A

SPとは(全体共通部分。ここについては教員側で作成する。)

## 【序論】(班内共通部分) A4(40×40)2枚程度 B

- ・トピックの紹介
- ・そのトピックを選んだ理由
- ・2軸に挙げたDFの紹介
- ・4象限の概要説明
- ・SPマトリクス模式図

## 【本論】

## 第一章(班内共通部分) A4(40×40)1枚程度 C

- ・トレンドの動向

## 第二章(班内共通部分) A4(40×40)1枚程度 D

- ・X軸選定の理由(インパクトが大きい理由および不確実性が大きい理由)
- ・Y軸選定の理由(インパクトが大きい理由および不確実性が大きい理由)

## 第三章(個別論述部分) A4(40×40)1-2枚程度 E

「1~4象限の詳細なシナリオはどうか」というのを基本的な問題提起の型とする。SPを進める過程で生じた疑問を問題提起することも可とするので、その場合、担当教員に確認すること。

## 【結論】(個別論述部分) F

「以上により、○○で△△な場合の××は□□のようなものになると考えられる。」

本論第三章が具体的なシナリオの形で述べられているのに対して、それを一般化した結論をここでまとめる。

## 【注及び解説1】(班内共通部分) A4(40×40)2枚以上 G

## 【注及び解説2】(個別論述部分) A4(40×40)2枚以上 H

シナリオ自体はどうしても飛躍的な内容で小説的なものになる。それを論理的なものとして提示するために、全ての論理展開に、その根拠となる情報を記載すること。

## 【添付資料1】(班内共通部分) 必要に応じて I

## 【添付資料2】(個別論述部分) 必要に応じて J

必要と思われるものを挙げる。網羅的に思考したことを示すためにも、IUマトリクス図は掲載すること。

※個人の卒論としては以上の形式。卒業論文集作成の際には、  
A B1C1D1G1H1 E1F1H1J1 E2F2H2J2 … B2C2D2G2I2 E10F10H10J10 …… E78F78H78J78  
という構成になる。



## 【講評】

- ・一旦完成させたあと、もう一度各班でしっかりと校正すべきであるが、受験勉強との兼ね合いで不十分なものとなっている。
- ・共通部分においても理解度や情報処理能力の差はみられていたが、個別論述部分になるとその差はさらに顕著に表れた。
- ・論文に合わせた文体や注の使い方を学習できたことは大学進学後に役立つものと考えられる。
- ・しかし、SPが予測という性質を持っているため、十分に詰め切れていない場合は疑義が多く残るものになっていることも事実である。
- ・用語の不統一や定義のズレなども散見され、時間に追われながらやっていることの負の部分が見える結果となった。
- ・どのような形で冊子を構成していくのがいいか、検討が必要である。

## 4. 未来を考える 国際シンポジウム

「未来を考える国際シンポジウム」(11月19日(土)実施)のまとめ・成果と今後。

### 【目的と方法】

海外から高校生を招待してともに活動を行うことにより、グローバルリーダーとして必要な様々な能力の向上と異文化に対する理解を深める。また、国内の他校生徒との交流により互いに刺激を受けることを目的とする。

招待した海外の高校の生徒とともに、「シナリオ・プランニング」や「パネルディスカッション」を試み、積極的な議論の場とする。

また、国内の高校生にも参加いただき、本校の発表やパネルディスカッションを聞いていただくだけでなく、各校の取り組みを「ポスター」によって発表し、高校生同士の交流の場を設ける。

### ◎参加者

- 1) 本校グローバルコース生徒(1・2年生)
- 2) 本校、中学3年生
- 3) 本校生徒の保護者
- 4) 海外招待校生徒・教員

St. Joseph's Institution(The Republic of Singapore)

Colegio de San Juan de Letran

(Republic of the Philippines)

Choate Rosemary Hall (United States of America)

Le Hong Phong High School(Vietnam)

Marie Curie High School(Vietnam)

- 5) 国内他校生徒・教員

大阪府立三国丘高等学校、大阪府立泉北高等学校、高槻中学校・高等学校、京都学園高等学校

- 6) 運営指導員、提携先関係者



### 【日程表】

	プログラム	場所	本校生以外の参加
8:30	グローバルコース生点呼	第一体育館	 海外招待生徒
8:45	準備開始		
10:45	中3生体育館へ移動		
11:00	オープニング		
11:04	司会挨拶		
11:09	STEPゼミとは?		
11:15	シナリオ・プランニングとは?		
11:21	高2SPプレゼンテーション①		
11:30	高2SPプレゼンテーション②		
11:39	混成SPプレゼンテーション①		
11:46	混成SPプレゼンテーション②		
11:53	パネルディスカッション準備		
11:55	パネルディスカッション		
12:25	講評		
12:30	司会挨拶(午前の部終了)	第一体育館	国内他校生徒 運営指導委員等
12:35	昼食		
13:20	ポスター発表開始	第一体育館	国内他校生徒 運営指導委員等
15:00	ポスター発表終了		
15:15	親睦会	カフェテリア	海外招待生徒 国内他校生徒
16:30	終了、解散		



### 【プレゼンテーション】

#### 2年生による

4月以来、シナリオ・プランニング(SP)に取り組んできたが、今回は以下の3つのトピックによる3チームの発表が、代表して行われた。

- ① “KIX in 20 years”
- ② “Misaki Koen in 20 years”
- ③ “The shape of tourism in Japan 20 years from now.”

3班目は海外生徒とのSPという試みになっている。

また、全チームのポスター発表が午後から行われた。



【パネルディスカッション】

今回のパネルディスカッションのテーマを  
“気候変動”

とした。

昨今、気候変動に関するニュースは世界で報道されている。異常なほどの夏の暑さ、季節外れの雪や台風等気候変動がもたらす社会への影響は計り知れない。

しかし、その原因の解明や対応策が十分に行われているとは言えない。そこで、各国の現状や取り組みについて海外の学生と意見交換を行い、高校生なりに問題に対する考察を深めたいと考えた。



【ポスター発表】

生徒同士の交流・意見交換の機会が案外少ないことに鑑み、積極的にこのような場を作るとともに、様々なアドバイザーからの指導・助言いただき、今後のSGH等の活動に資することが目的である。

参加者とその内容は以下の通りである。(なお、①, ②, …… , ⑳はポスターの番号)

◎国内他校のポスター等による発表

学校名	グループ数 (生徒数)	内容・テーマ
三国丘高等学校	2 (10)	①スティックのり ②バナナペーパーストロー
泉北高等学校	1 (5)	③SDGS～Discovering Inclusive Cities in Swedenmark～
高槻中学校・高等学校	3 (16)	④No More エボラウイルス ⑤脱!! 不当労働! ⑥アジアにいる肥満の「あなた」に伝えたい。
京都学園高等学校	3 (12)	⑦Nitrogen Oxide ⑧Climate Change ⑨Poverty



◎本校のポスター発表

		題名
1 年 生	S	⑩ 子育てしやすい都市について
		⑪ 家庭環境は文化レベルに影響するか～読書編
		⑫ 若者の職の安定性に対する意識～安定を求める?
		⑬ 高校生の恋愛観と結婚観
		⑭ お菓ちゃんと飲めてますか?～日常生活とお菓
	T	⑮ 医療と生命観～生命観を左右するもの
		⑯ 地球を救う水素エネルギー?!
		⑰ これからの家のカタチ
		⑱ Ba-me-view
		⑳ ゴミで発電を?!
		KAI

		題名
E	⑳	中学生が商店街を救う?!
	㉑	サイコウの音楽
	㉒	再生可能エネルギーを身近に
	㉓	観光×テクノロジー
	㉔	タピオカが残したもの
P	㉕	東の軽井沢 西のちはや
	㉖	交野市 大豊作! 作戦
	㉗	岬町覚醒計画
	㉘	未来に輝く徳島の光
	㉙	

トピック			
2 年 生	⑳	SP1	KIX in 20 years
	㉑	SP2	Misaki Koen in 20 years
	㉒	SP3	"Sightseeing of Sakai in 2040 ~Be Familiar with our town~"
	㉓	SP4	YUMEHANABI in 10 years ~with lights and music~
	㉔	SP5	The TV industry in 15 years
	㉕	SP6	What kind of drama will be popular in 10 years?
	㉖	SP7	Nintendo in 10 years
	㉗	SP8	The beginning of Nippon



【総括と今後の取り組み】

文化の異なる者同士の議論がうまくかみ合うのか、英語力が十分発揮できるのかと不安は大きいですが、チャレンジする機会を設けることに意義がある。また、積極的な活動の結果、様々な課題を発見することが、次の場面における大きな成果につながるものである、と考え始まったシンポジウムもSGHの5回を終了した。毎回異なるテーマ(ジェンダーから考える将来のワークライフバランス, How can high school students acquire global leadership?, Gender Equality and Leadership)を設定したパネル・ディスカッションと留学生徒との協働シナリオ・プランニングの試みは、準備や実施の困難さを乗り越え、生徒達は様々な刺激と次につながる意欲を得たものと思われる。また、ポスター発表には他校から参加もあり、本校の生徒は積極的に他校のポスター発表を聞き、知識や考察の幅を広げようとしていた。

来年度より、本校は新しいグローバル活動を開始するが、この国際シンポジウムは引き続き開催する予定である。日本語で考えたものを英語にして伝達するのではなく、日本語的な視座を持ったまま英語での思考も身につけるなど、これまで築いてきた交流の成果の上に、新たな目標設定とその達成を図りたいと考えている。



### 5. 3月 国内外のフィールドワーク

昨年3月に実施されたフィールドワークの概略と研究課題・交流内容

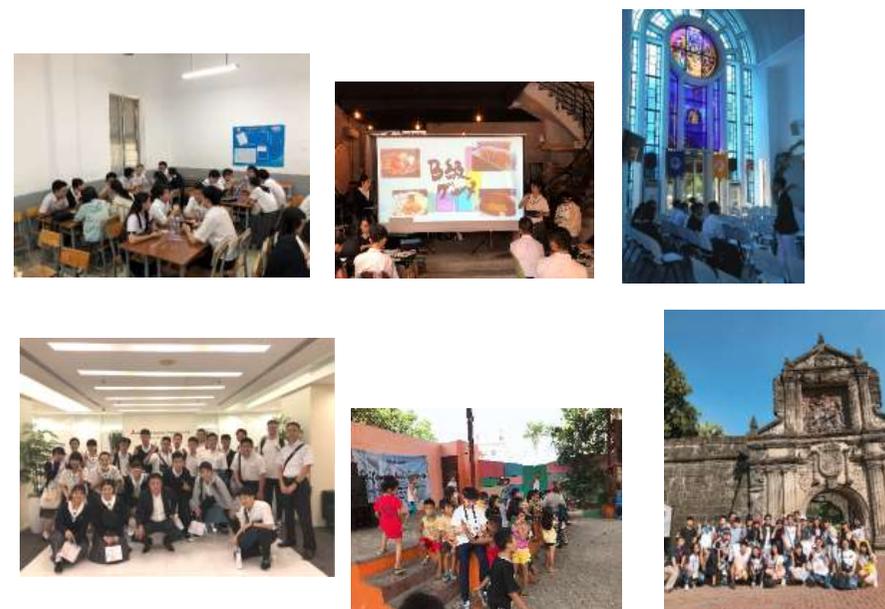
#### 【概略】

No.	行先	日程	内容
1	国内コース (東京・横浜・つくば)	3/13 (水) ～ 3/16 (土)	新大阪出発→新横浜着 東京工業大学すずかけ台キャンパス訪問 台場周辺散策 日本科学未来館見学 台場周辺での判別研修 講演(本校卒業生の弁護士による) 産総研訪問 アクセンチュア株式会社訪問 東京出発→新大阪着

2	マレーシア (ジョホールバル) シンガポール	3/13 (水) ～ 3/18 (月)	チャンギ国際空港着 →日本旅行シンガポール中島社長講和(シンガポールの歴史と発展) St. Joseph's Institution(シンガポール) 高校生と協働でのワークショップ活動 テーマ別のプレゼンテーション グループ別ディスカッション、まとめとプレゼン 現地大学生とグループ別のフィールドワーク 理化学研究所訪問・講演等 →マレーシア(ジョホールバル)へ陸路にて移動 マレーシア工科大学 大学生・大学院生と協働でのワークショップ活動 テーマ別のプレゼン・グループ別ディスカッション マレーの村体験 マレーシア工科大学 レクチャー、ディスカッションのまとめとプレゼン →シンガポールへ陸路にて移動 →ナイト・サファリ チャンギ国際空港発→
---	------------------------------	---------------------------------	---



No.	行先	日程	内容
3	フィリピン (マニラ)	3/13 (水) ～ 3/18 (月)	→マニラ国際空港着 Colegio de San Juan de Letran 高校生と協働でのワークショップ活動 キャンパスツアー、レクチャー聴講 グループ別ディスカッション(テーマごとにグループは変わる) ディスカッションの内容についてのプレゼンテーション Letranの学生とグループ別フィールドワーク(マニラ市内) 市内観光 スモークマウンテン見学、GK財団訪問 マニラ国際空港発→
4	ベトナム (ホーチン)	3/13 (水) ～ 3/18 (月)	関空発→ホーチミン国際空港着 3/13(水) 現地企業訪問(三菱商事にてキュービー様からのご講演)(夕刻) Le Hong Phong High School 訪問(終日) Marie Curie High School 訪問(終日) Marie Curieの学生とグループ別フィールドワーク(ホーチミン市内) 3/18(月) AABベトナム訪問(終日) ホーチミン市内観光 マングローブ林・エビ養殖場・塩田見学 ホーチミン空港発→関空着



【研究課題・交流内容】

行先	連携先	内容
1	国内コース (東京・横浜・つくば)	東京工業大学 すずかけ台キャンパス 訪問先の Takahashi 先生はフランスのナント大学(Université de Nantes)で教授職を定年退官後、東京工業大で留学生向け生命科学の授業を英語で行っている。 DNA の発見と DNA 組換えの役割についての講演と研究施設の見学を実施。
	産業技術総合研究所 つくばセンター	2 班に分かれて、午前・午後交代で2つのプログラム「計量標準と国際標準 (A 班)」「エレクトロニクスにおける微細加工技術 (B 班)」を実施。 A 班では、研究者からの講義と生徒発表、研究者を交えての改善のためのディスカッションを行う。B 班では、微細加工技術についての講義と実習を行う。
	アクセンチュア	企業が行っている課題発見から課題解決についての講義を受けた後、ワークショップ (スポーツ業界での新たな商品・サービスの提案) を行う。

2	マレーシア・シンガポール	Presentations by UTM 1.Education in Malaysia 2. How to keep city clean in Malaysia 3.Women's social advancement in Malaysia 4. Air pollution in Malaysia Presentation by SN students ・ School introduction 1.Education in Japan 2. How to keep city clean in Japan 3.Women's social advancement in Japan 4. Air pollution in Japan Discussion in 4 groups based on the following topics 1. What is needed for better educations in Malaysia and Japan? 2. What is needed for a better living environment? 3. Current situations on women's social advancement in some countries and the ideal women's social advancement for the whole world 4. How to solve current pollution in Malaysia. Summary Presentation by all groups.
	St.Joseph's Institution	Presentations by UTM 1.Education in Singapore 2. How to keep city clean in Singapore 3.Women's social advancement in Singapore 4. Air pollution in Singapore Presentation by SN students ・ School introduction 1.Education in Japan 2. How to keep city clean in Japan 3.Women's social advancement in Japan 4. Air pollution in Japan Discussion in 4 groups based on the following topics 1. What is needed for better educations in Singapore and Japan? 2. What is needed for a better living environment? 3. Current situations on women's social advancement in some countries and the ideal women's social advancement for the whole world 4. How to solve current pollution in Singapore . Summary Presentation by all groups.

行先	連携先	内容
3	フィリピン (マニラ)  Colegio de San Juan de Letran	1. Campus Tour Guided by Letran students 2. Experience Philippine culture Folk dance 3. Experience Japanese culture Tea Ceremony / Kendama / Calligraphy / Origami 4. Lecture by a teacher from Letran, discussion and presentation “The Philippine Culture” after listening to the lecture, the students talk about each culture 5. How to Solve the Problems of the Philippines SN students suggest the solutions to 4 different problems and discuss them with Letran students
	G K財団	活動内容のレクチャー、100 人分の昼食準備と配布 GK 村の子供達との交流、寄付に対する感謝のセレモニー GK 村 (バセコ地区) の見学

4	ベトナム (ホーチミン)  Le Hong Phong High School	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Introduction of LHP &amp; SN</li> <li>・ Introduction about Ho Chi Minh City &amp; Osaka Prefecture</li> <li>・ Presentations by SN students about the promotion of trains in Vietnam, measures against natural disasters, education, and culture in Japan and Vietnam.</li> <li>・ Discussion (divided into 4 groups). LHP &amp; SN students discuss the topics introduced in SN students' presentations.</li> <li>・ Presentation by each group based on the group discussions.</li> </ul>
	Marie Curie High School	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Introduction of MC &amp; SN</li> <li>・ Discussion (Divided into 3 groups)</li> <li>Making a plan to let Vietnamese people know attractive points of Japan and increase the number of Vietnamese tourists to Japan.</li> <li>・ Presentation by each group</li> </ul>
	AAB Vietnam	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Introduction of AAB by the president</li> <li>・ Lecture by a staff member from AAB “How to Create an Event Plan”</li> <li>・ Presentation</li> <li>Making a plan to let Vietnamese people know attractive points of Japan and increase the number of Vietnamese tourists to Japan.</li> </ul>



## 成果・評価・展望

1. 成果
2. 評価
3. 展望

## 1. 成果

### 1. カリキュラムの開発と実施

①1年生	参照ページ
・STEP ゼミ Political (政治学的分野) の実施	16,17
・STEP ゼミ (基礎) Technological (科学技術的分野) の実施	18,19
・STEP ゼミ (基礎) Economic (経済的分野) の実施	20,21
・STEP ゼミ (基礎) Societal (社会学的分野) の実施	22,23
・Global English (グローバル・イングリッシュ) の実施	24
・国際シンポジウムにおける、プレゼン発表・ポスター発表	47,66,67
・中間発表会における、企画運営・プレゼン発表・ポスター発表(S,TとGE)	66,67

②2年生	参照ページ
・STEP ゼミ Political (政治学的分野) の実施	30,31
・STEP ゼミ Societal (社会学的分野) の実施	32,33
・STEP ゼミ Economic (経済的分野) の実施	34,35
・STEP ゼミ Technological (科学技術的分野) の実施	36,37
・SP (シナリオ・プランニング) の実施	38,39
・Global English (グローバル・イングリッシュ) の実施	40,41
・国際シンポジウムにおける、企画運営・SPプレゼン発表・SPポスター発表 英語によるパネルディスカッション	45,46,47 70,71,74,77
・中間発表会における、企画運営・プレゼン発表・ポスター発表(SP)	70,71

③3年生	参照ページ
・SP (シナリオ・プランニング) の実施	42,43

2. 教材の開発	参照ページ
・各STEP ゼミ	16,30等
・段階的SPの手順、生徒へ参考SPの提示	25,38,39
・卒業論文、英語による論文のアブストラクトの作成	42,43,72

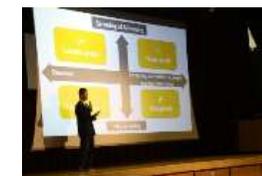
3. その他の活動	参照ページ
・タブレット端末の全校生徒への導入による、情報活用処理能力の向上	
・春期の国内外フィールドワーク	48-51,78,79
・産官学グローバルネットワークの構築 (海外4か国5校、国内2校の高校生)	46

4. 成果等の発信	参照ページ
・未来を考える国際シンポジウム (4か国5校海外生徒、4校の国内生徒)、中間発表会 資料冊子・卒業論文選の作成だけでなく、DVDの作成・送付も	44-47 74-77
・ホームページ (行事実施毎に更新、発表会・報告書等資料の発信、英語版の作成)	80

令和元年度 (指定5年次) の主な実績 <①, ②, ③は学年を表す>

月	日	曜日	特別授業	フィールドワーク	1年生					2年生	内容・連携先
					P	E	S	T	GE	STEP	
4							○				オリエンテーション(G-Mission)、6回
5	22	水	①		○						SDGs
6	14	水	①				○				社会心理学
7	9	火		①	○						
7	9	火		①			○				
7	12	金	①			○					経済学
7	23	火	①				○				琵琶湖
7	23	火		①			○				
8	9	金		①							
10	18	金							○		第67回統計グラフ全国コンクール 入選
10	24	木		①			○				
11	19	土			未来を考える 国際シンポジウム						4か国5校の外国人生徒 (10名) 国内4校生徒 (42名) 生徒プレゼンテーション パネルディスカッション ポスター発表
11	26	火							○		第7回高校生ビジネス・グランプリ Best100
11	29	金	①				○				環境問題
12	24	火		①			○				SDGs
1	16	木							○		第61回大阪府統計グラフコンクール 入選
2	16	日							○		キャリア甲子園準決勝 (決勝進出1チーム)
2	22	土			中間発表会						国内1校 (4名) 生徒プレゼンテーション ポスター発表
3月の行事はすべて中止											

注 例年通り、3月に国内外のFW (フィールドワーク) を計画 (東京方面、フィリピン、ベトナム、マレーシア・シンガポール) していたが、新型コロナウイルスの影響により直前に中止となった。SGH 甲子園、キャリア甲子園決勝等も同様である。



## 2. 評価

### 1. カリキュラムの開発と実施

#### ①1年生

STEP ゼミ(基礎)、GE (グローバル・イングリッシュ)、講演会・特別授業、フィールドワークの活動は、5年目を迎える内容・方法の改善が進んだ。さらに、2年生におけるSP (シナリオ・プランニング) を前倒して行うなどの工夫が行われ、効果的なカリキュラム開発につながった。

#### ②2年生

1年生段階における活動、STEP ゼミを踏まえ、「エネルギー」をテーマとするSPを実施した。それを11月の国際シンポジウムで、それを改定して2月の中間発表会で発表した。

#### ③3年生

班ごとにまとめたSPを論文として仕上げるとともに、個人執筆部分にも各自が取り組んだ。また、論文の要約をフォームに従って英文の要約(アブストラクト)としてまとめた。これらも含めて「卒業論文集」として発刊するとともに、その「選集」を発刊した。

以上、概ね所記の目的を達成している。

### 2. 教材の開発

SPにつながるSTEP ゼミ、講演会・特別授業、GEの内容がほぼ確立した。高校生が行うにふさわしいSP教材の開発とそのマニュアル化を一応完成し、その成果を「卒業論文選」として刊行した。

### 3. 成果等の発信

発表会・ホームページ(英文を含む)等を通じてカリキュラム内容や開発した教材・成果物の発信は、引き続き積極的に行われている。

### 4. 生徒の意識

グローバル(GL)コース生の海外への関心は高く、留学などの実際の行動にもつながっている。また、様々な能力が伸張したと感じる生徒の割合も、一般コースの生徒に比べ顕著に高い。しかし、卒業時に直接海外に進学するよりは、大学時の留学・海外研修レベルに意識がとどまっている傾向が強い。なお、高校3年生に対する調査ではGLコースの教育に満足を感じている生徒は86%であった。

【アンケート結果】「大いにある」「ある」と答えた生徒の割合

①発表・議論などにおいて、英語を活用する力	GL生 74%	一般生 37%
②情報収集やプレゼンテーションなど、ICTを活用する力	GL生 82%	一般生 45%
③グループ活動での自発的な行動をとる姿勢	GL生 80%	一般生 54%
④自らの考えや論拠を整理して議論し、質問に答える力	GL生 83%	一般生 48%
⑤世界の色々な問題について興味を持ち、グローバルな視点で考える力	GL生 77%	一般生 46%
⑥グループの中でコミュニケーションを図り、目的のために協働する力	GL生 80%	一般生 55%

### 5. 生徒の成長

未来を考える国際シンポジウムを当初の予定より1年前倒しで実施し、SPのプレゼンやパネルディスカッションを英語で行っている。この行事の生徒に与える影響は大きく、生徒の意欲的な活動の成果は勉強面でも顕著に表れている。他のコースの生徒に比べ、進学成績の面でもよい結果を残している。

### 6. グローバル以外の生徒への波及、校内体制

海外研修への参加者数、外部コンテストや発表会、トビタテ！留学JAPANへの応募者数・合格者数は、グローバルコース以外の生徒でも増加している。(2019年度は全校で11名合格) また、4技能の総合的な英語力の面でも、学校全体の伸びは顕著である。

一方、中学校では「ポスター発表」が行われ、各学年の発達段階に応じた工夫により、様々な発表が行われた。ここには、GL生の活動による刺激の効果が顕著に表れている。

なお、国際シンポジウムのポスター発表には国内4校43名の生徒が参加して交流を深めたが、SPを通じてのネットワークの構築は、その段階にとどまっている。

### 7. 評価とその方法

本プログラムに関する定量的・継続的な評価の方法・分析については、十分であるとは言えない状況のままである。

スーパー グローバル ハイスクール 目標設定シートより

上段	SGH 対象生徒
下段	SGH 対象生徒以外

### 1. 本構想において実現する成果目標の設定 (アウトカム)

年度	25	26	27	28	29	30	元	目標値
a 自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数(人)	—	—	9	22	19	16	22	160
b 自主的に留学又は海外研修に行く生徒数(人)	—	—	9	29	20	11	15	120
c 将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合(%)	—	—	72	70	59	60	63	100
d 公的機関から表彰された生徒数、又はグローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数(人)	—	—	2	6	7	41	25	40
e 卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRのB1~B2レベルの生徒の割合(%)	—	—	15	27	27	41	69	100
f 将来起業したいと思っている生徒数(人)	—	—	6	9	8	13	8	40

### 1' 指定4年目以降に検証する成果目標

年度	25	26	27	28	29	30	元	目標値
a 国際化に重点を置く大学へ進学する生徒の割合(%)	—	—	—	—	—	24	27	60
b 海外大学へ進学する生徒の人数(人)	—	—	—	—	—	1	0	10
c SGHでの課題研究が大学の専攻分野の選択に影響を与えた生徒の割合(%)	—	—	—	—	—	76	81	80
d 大学在学中に留学又は海外研修に行く卒業生の数(人)	—	—	—	—	—	2	8	80

### 2. グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標 (アウトプット)

年度	25	26	27	28	29	30	元	目標値
a 課題研究に関する国外の研修参加者数(人)	2	2	45	51	46	53	0*	80
b 課題研究に関する国内の研修参加者数(人)	19	19	78	105	138	131	121	160
c 課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数	0	0	5	7	7	7	7	10
d 課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)	0	0	22	66	40	43	57	150
e 課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)	0	0	11	33	50	64	30*	50
f グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数(人)	6	9	0	11	16	86	67	60
g 帰国・外国人生徒の受入れ者数(留学生も含む。)	8	3	3	4	7	9	9	30
h 先進校としての研究発表回数	0	0	3	3	5	5	6	10
i 外国語によるホームページの整備状況	×	×	×	○	○	○	○	○
j 産官学グローバルネットワークの構築	0	0	0	7	7	9	11	50

\*新型コロナウイルスの影響により、春期フィールドワーク中止のため

### 3. 展望

#### 1. SP、STEPゼミ、GE

これまでの実績とその反省を踏まえ、今年度は大きくカリキュラムを変更した。つまり、高校1年次の早い段階でSTEP基礎を終え、STEPゼミに移行する。これによりSTEPゼミの活動時間を確保し、各分野の知識や理解を深めた上、高校1年次の後半にSPを前倒しで行った。

SPはビジネスの手法であるだけに、非常に難しいものである。高校生にでもできるよう簡略化を行い、できるだけ無理なくSPの活動に取り組めるように工夫を凝らしてきたが、それでもやはり、苦勞する生徒も多数見受けられる。そのような中、SPを早く始めることで、その演習を少しでも多く行い、SPに対する理解を深めるとともに、その手法や考え方に慣れることができると思われる。来年度、高校2年次におけるSPの取り組みにおいて効果が表れると期待される。

また、引き続きSTEPゼミの各分野とGEの連携をさらに進化させて授業を行うことで、それぞれの活動が有機的に結びつき、相乗効果が上がるように工夫を凝らした。

#### 2. 今後の課題

本校のSGH事業はここで終了するが、汎用性のある未来予想システムであるSPを高校生に指導するための教育課程開発を目指す、というその目的をできるだけ完成形に近づけたい。SGHの主体となって活動するグローバルコースに所属する生徒が高校2年生・3年生として来年度も活動することになる。1. で述べたような工夫を加えつつ、カリキュラムとしての完成度のアップと開発教材の充実を図りたい。

そのためには、以下のような課題を克服する必要がある。

- ・成果の普及をいかに行うか。
- ・SPの指導法のさらなる充実をいかに行うか。
- ・SPの指導者の育成・資質向上をいかに行うか。
- ・内容の論理性の充実・効率的な議論の構築をどのように行うか。
- ・生徒の知識や情報収集能力の差を集団的指導の中、どう解消するか。
- ・中高一貫教育の特性をいかに有効利用するか。

また、広報活動の充実と産官学グローバルネットワークの構築の面では、以下に留意する。

- ・「未来を考える国際シンポジウム」の効果は非常に大きい。その成功を踏まえて次年度以降も開催を継続し、内容の充実と交流する高校の更なる拡大などを図る。
- ・本校のSGH活動の成果であるSPのカリキュラム開発の成果を踏まえ、次年度からの本校の新しい取り組みにおける「未来を考える国際シンポジウム」の在り方を模索し、ここにおいても産官学グローバルネットワーク構築を目指し、国内の自治体や企業・海外の企業や組織との連携を深める。



#### 3. 来年度からの本校の新しい取り組みに向けて

本校では、SGHによる5年間の様々な取り組みの成果・反省を踏まえ、新高校1年生から「グローバル探求ゼミ(GTS)」を立ち上げる。

ここでは、1単位の学校設定科目「グローバル探求ゼミ」を8時間目に増単位として設定し、希望する生徒が選択できる形態をとる。その概略は、以下の通りである。

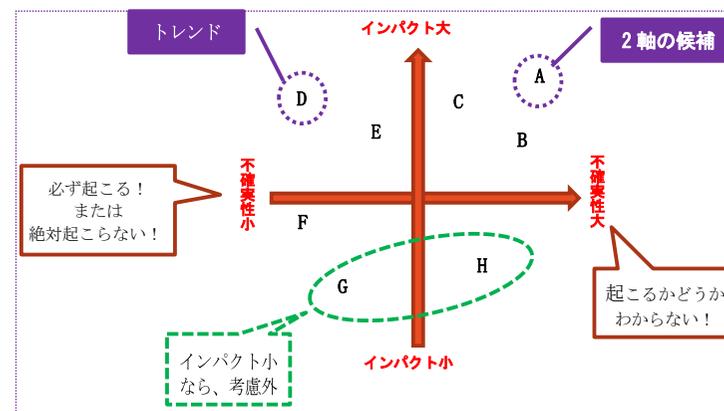
- ①今後の社会で必要とされる、論理力・批判的思考力・課題発見と解決能力・共働力・コミュニケーション力などを身につけるための基礎的な素養を養成する。
- ②生徒は次の4つゼミから選択し、希望する探求活動をグループで行う。  
 “Natural Science & Technology Seminar” “Social Science Seminar”  
 “Cultural Studies Seminar” “Global Studies Seminar”
- ③1年次は、前半において基本的な技術・手法の習得を行う。後半においては、上記4つのゼミに分かれて活動する。3月には、従前どおり「国内外フィールドワーク」を実施する。
- ④2年次は、前半において③のゼミ活動を継続するが、「未来を考える国際シンポジウム」を意識した活動も行う。後半は、2年間の活動の成果を論文として作成する。
- ⑤生徒の探求活動の内容として、各種コンテストへの参加も考えられる。

その際の留意点として、

- ・教員の研修・指導力向上への取り組みをさらに充実させる。そのための具体的な研修計画、目標設定と計画の実践。
- ・中学校では「ポスター発表」を行っているが、この取り組みをGTSにつなげるものとする。
- ・これまでの連携先に加えて、新たな連携先を開拓する。

#### 4. 評価について

- ・外部の専門家にも参加していただいた新しい組織を設立して、評価の内容や方法について具体的な取り組みを行う。
- ・評価の方法・内容・時期を定め、計画的で客観的な評価を実施する。



## 資料・画像編

### -SGHの5年間-

1. 構想調書・概念図
2. 一年生    3. 二年生    4. 三年生
5. 報告書等
6. 未来を考える 国際シンポジウム
7. 3月 国内外フィールドワーク
8. その他

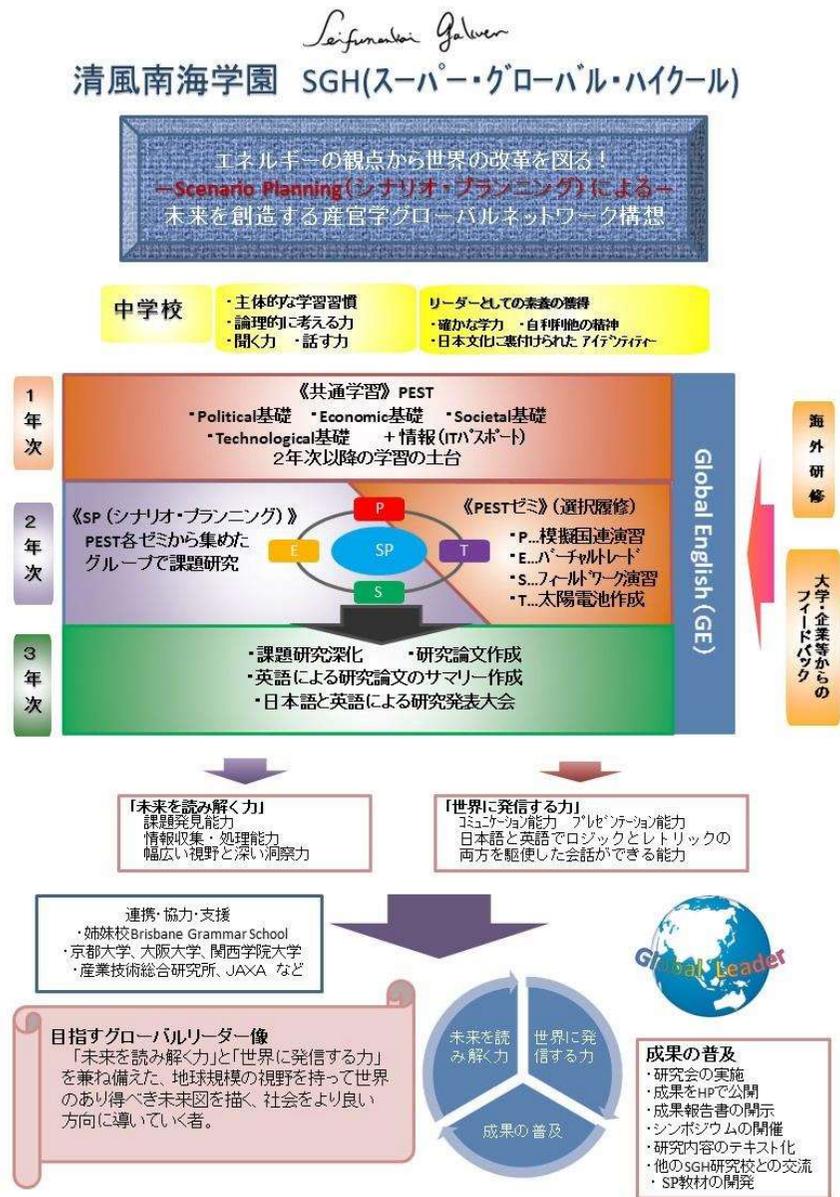
## 1. 構想調書・概念図

平成27年度スーパーグローバルハイスクール構想調書の概要

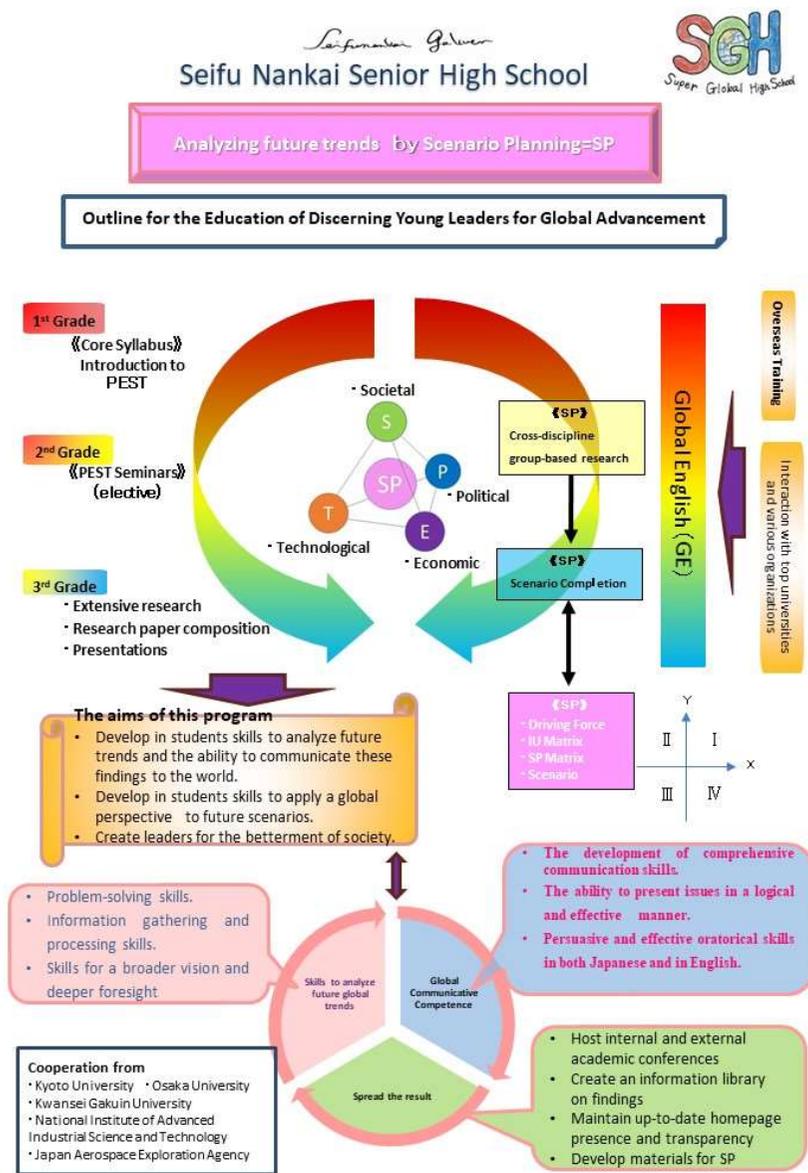
指定期間	ふりがな	せいふうなんかいこうとうがっこう				②所在都道府県	大阪府
27～31	①学校名	清風南海高等学校					
③対象 学科名	④対象とする生徒数					⑤学校全体の規模	
普通科	1年	2年	3年	4年	計	中学校 816人 (1年：295 2年：269 3年：252) 高等学校(普通科) 1028人	
	313	331	384		1028		
⑥研究開発 構想名	「エネルギーの観点から世界の改革を図る —未来を創造する産官学グローバルネットワーク構想—」						
⑦研究開発 の概要	新規にグローバルコースを設置し、以下の取り組みを行う。 I、「シナリオ・プランニング」を用いた未来予測を、国内外の産官学と協働して行う。 II、Iに必要な専門的視座を得るため、「PESTゼミ」を開講する。 III、Iの協働演習を円滑に進め、効果的に発表するために「GE」を実施する。						
⑧研究開発 の内容等	⑧-1 全体	<p><b>(1) 目的・目標</b> 【目的】 グローバル・リーダーを「地球規模の視野を持って世界のあり得べき未来図を描き、社会をより良い方向に導いていく人材」と定義し、その育成のために、「未来を読み解く力」と、「世界に発信する力」を身につけるための教育システムを開発する。 【目標】 ・ビジネス手法「シナリオ・プランニング（以下SP）」を学習教材として体系化する。 ・国内外の産官学と、SPの協働演習を通じて交流し、その手法を普及する。現在11の協力団体を指定期間中に50に増やす。 ・海外との交流機会を増やし、4技能全てを高めるための英語教育を行うことで、TOEFL iBT100点以上取得者を60名以上輩出する。 ・課題研究に必要な情報処理を円滑に行うために、情報技術の実践的な国家資格「ITパスポート」を全員が受験し、合格する。</p> <p><b>(2) 現状の分析と研究開発の仮説</b> 日本の伝統的な価値観を重んじる教育を行ってきた本校は、高い進学実績を誇り、優秀な人材を輩出してきた。その反面、生じてきた課題として、保守的なキャリア志向、英語学習における「話す」能力の未成熟、主体性の不足、情報技術の未習得等が挙げられる。SPを用いた未来予測を高度なレベルで行い、その研究成果を効果的に発表するための力を身につけることで、これらの課題を克服できるという仮説を立てる。</p> <p><b>(3) 成果の普及</b> 年に2回中間発表会を行い、高校3年次には市のホールを用いて研究発表を行う。各プログラムに関する感想を毎回生徒から集め、編集して開示する。英語版のHPも作成する。協働演習を通じてSPを教材として普及し、共に未来を考えるネットワークを構築する。</p>					
	⑧-2 課題研究	<p><b>(1) 課題研究内容</b> テーマ：「シナリオ・プランニングを用いて未来のエネルギー事情を考える」 大手エネルギー会社ロイヤル・ダッチ・シェル社が用いたことで有名なシナリオ・プランニングの手法を取り入れた未来予測を、昭和シェル石油(株)の専門家による監修を受けて高校生向けに教材化し、実施する。これは複数の「起こりうる未来のシナリオ」を論理的に創り上げ、未来に備えようという方法論であり、多様な未来の可能性を考えることで、リスクを回避し、より望ましい未来への道筋を模索しようというものである。シナリオを作るプロセスの中で、視野を広げ、多様な「未来を動かす原動力」となる要素</p>					

	<p>を採り出し、それらの重要性や因果関係を考察し、主体的に未来を創り出す力を育成する。高校生の獲得し得る知識には限界があるため、生徒が課題研究として設定する未来予測のテーマを『エネルギー』に絞り、関連する情報を提供していく。</p> <p>SPを実施するためには教科教育の枠を超えた知識や分析力が必要となる。Political、Economic、Societal、Technologicalの4つのゼミを開講して専門的な視座を獲得する。生徒は1年次に全てのゼミの基礎講座を受講し、2年次にはいずれかのゼミを選択する。SPはこの4つのゼミから数名ずつを集めた10数人の班を一つの単位として実施する。</p> <p>高校3年次には、課題研究の集大成としての研究発表大会を、国内外の協力団体を招いて、生徒主体で実施する。</p> <p><b>(2) 実施方法・検証評価</b> 【実施方法】 ・週2時間の総合学習の時間を使い、各学年で以下のように実施する。 高校1年次：『PESTゼミ（基礎）』『GE』『PIT』 高校2年次：『SP』『PESTゼミ』『GE』 高校3年次：『SP』『GE』 ・外部の専門機関（大学、企業、地方公共団体等）や高校と連携し、研究開発内容について監修を求め、協働SP演習を行う。 【検証評価】 ・各時間における自他の感想や評価を生徒から集めてポートフォリオ化し、検証する。 ・定期的にポートフォリオをもとにレポートを作成させ、検証する。 ・中間発表会、研究発表大会に各協力団体を招き、評価を求める。 ・定期的な生徒、保護者、職員に対するアンケートを実施する。</p> <p><b>(3) 必要となる教育課程の特例等</b> 特になし</p>
⑧-3 上記以外	<p><b>(1) 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価</b> ・発表をより広範囲に効果的に行い、また、国外の協力校とも協働してSPを行うために、『GE (Global English)』の授業を行い、英語の4技能を育成する。 ・研究に要する膨大な情報処理を円滑に行うため、『PIT (Practical Information Technology)』の授業を行い、ビジネスレベルの情報処理技術を身につける。 ・「校内自由研究グランプリ」を実施し、個人単位での研究と発表を行う。 ・国語・英語・情報の授業内容を課題研究に則して改革する。</p> <p><b>(2) 課題研究の実施以外で必要となる教育課程の特例等</b> 特になし</p> <p><b>(3) グローバル・リーダー育成に関する環境整備、教育課程課外の取組内容・実施方法</b> ・海外連携先の拡充と、そのための専門担当部署の設置。 ・ICT環境の充実として、各HRクラスへの電子黒板とPCの設置。 ・映像研究部の新設。 ・国内修学旅行を、海外への研修旅行に変更。</p>
⑨その他 特記事項	<p>本校は、上記の構想を実施するため、平成27年度よりグローバルコースを新設する。平成27年3月に、新規連携先であるマレーシア工科大学へ研修旅行を行う等、既にそのための取組みを開始している。</p>

概念図



概念図 (英語版)



## 2. 一年生

### STEPゼミ (基礎)

Societal, Technological, Economic, Political の4つの分野のゼミを全員が受講し、その成果を、国際シンポジウムや中間発表会の舞台でのプレゼンやポスター発表する。これは、2年生での研究やSP (シナリオ・プランニング) につながるものである。



講演会・特別授業・FW（フィールド・ワーク）

STEPゼミの内容につながる、あるいは、情報収集や発信、コミュニケーション能力の伸長を図ることを目的に、専門家による本校で講義を行っていただいたり、大学や研究所に行ったり実際に体験に取り組んだ。



3. 二年生

STEPゼミ

生徒は、Societal, Technological, Economic, Politicalの4つのゼミのいずれかに所属し、より深い探究活動を行う。その成果を、国際シンポジウムや中間発表会の舞台でのプレゼンやポスター発表し、SPの実施において身に着いたものが発揮される。



**General Assembly**

International Chapters and Committees  
Other (Special) Assembly

議案：環境問題の深刻化に伴い、持続可能な開発目標（SDGs）の達成に向けた取り組みを推進し、社会貢献活動の充実を図ることを目的として、本学で「環境問題に関する国際シンポジウム」を開催することを決定した。本学は、このシンポジウムを通じて、国際社会と連携し、環境問題の解決に取り組むこととなる。

議案：本学は、国際社会と連携し、環境問題の解決に取り組むこととなる。本学は、このシンポジウムを通じて、国際社会と連携し、環境問題の解決に取り組むこととなる。

**財務&株式**

剰余金剰余金  
ROE（自己資本利益率）  
PER（株価収益率）  
配当利回り（%）

**CSR（企業の社会的責任）**

労働環境、  
環境への意識、

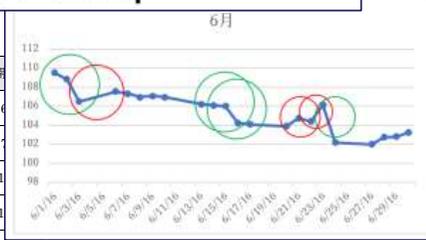
**清風南海生として**

学生との関わり  
ボランティア活動  
ホームページのリニューアル

**シェア**

企業の認知度、  
業界別シェアランキング、

生徒が参加した主な模擬国連大会	主催者	開
MUN KYOTO (オブザーバー)	京都外大西高等学校	6月
MUN OSAKA	関西国際大学	12月
新学校模擬国連大会	新学校	12月



**ソーラーパネルとは**

メリット

デメリット

10代の女性を対象に約200人にアンケートを実施した。今回は本校の卒業生にもアンケートの回答・協力をいただいたため、10代の方の大半は大学生だと考えらる。よって今回は10代の方も20代とみなした。

結果を踏まえたことあるか

Q2. 理想のプランケットを買う価値

Q3. 理想のプランケットをレンタル価値

この結果から、約70%の女性が冷えを感じ、プランケットは実用的であるとわかる。

販売価格は5,000円と設定したので、半数以上の20~30代の女性の理想の価格となった。体を覆うほどのサイズなので、1,000~2,000円層の女性も購入する見込みがある。

レンタル価格は500円と設定したので、20~30代の女性の80%以上の理想の価格となった。

SP (シナリオ・プランニング)

8班程度のグループに分かれてSPを行い、国際シンポジウムや中間発表会の舞台でプレゼンやポスター発表する中でさらに練り上げ、論文の完成を目指す。



### 4. 三年生

#### 卒業論文集

各班によるSP(シナリオ・プランニング)の論文を、「SGH卒業論文集」とその抜粋である「SGH卒業論文選」としてまとめた。



### 5. 報告書等

各年次の「研究報告書」はほぼ同様の内容・構成であるが、各表紙と初期の頃に特徴的な部分を抜粋しておく。



## 6. 未来を考える国際シンポジウム

本校 SGH の中心的で効果的な行事であり、2年目から1年前倒しで実施している。海外4か国、5校の高校生を招待し、1週間にわたって交流活動を行う。テーマを決めてのパネル・ディカッション (PD) や共同シナリオ・プランニング (SP) の成果を舞台上で発表している。



## パネルディスカッション

国際シンポジウムにおいて普段の活動 (STEP ゼミ、SP) の発表以外に特徴的で有意義な取り組みとして、パネルディスカッションがある。



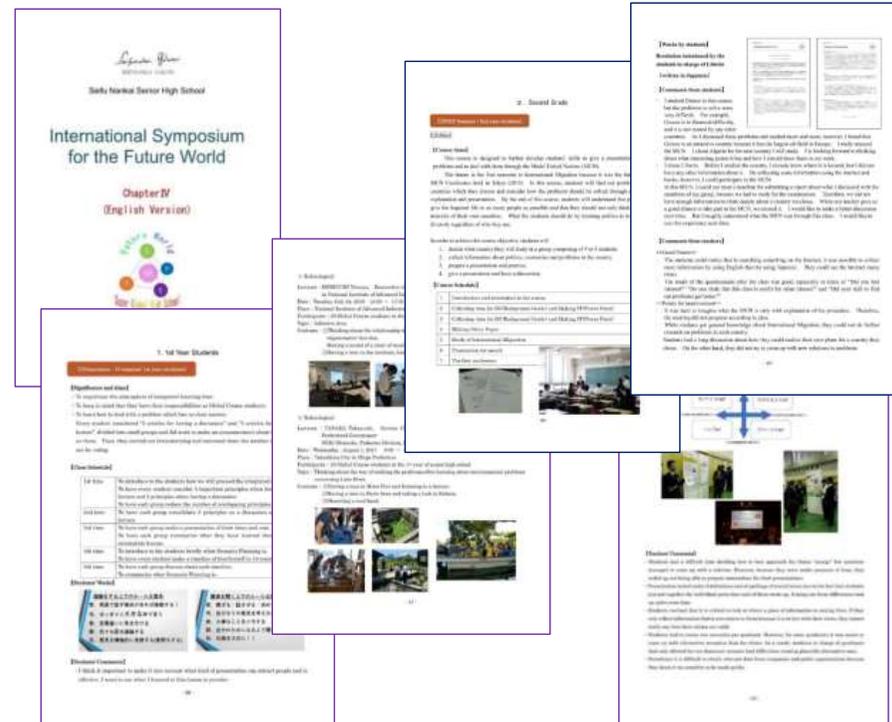
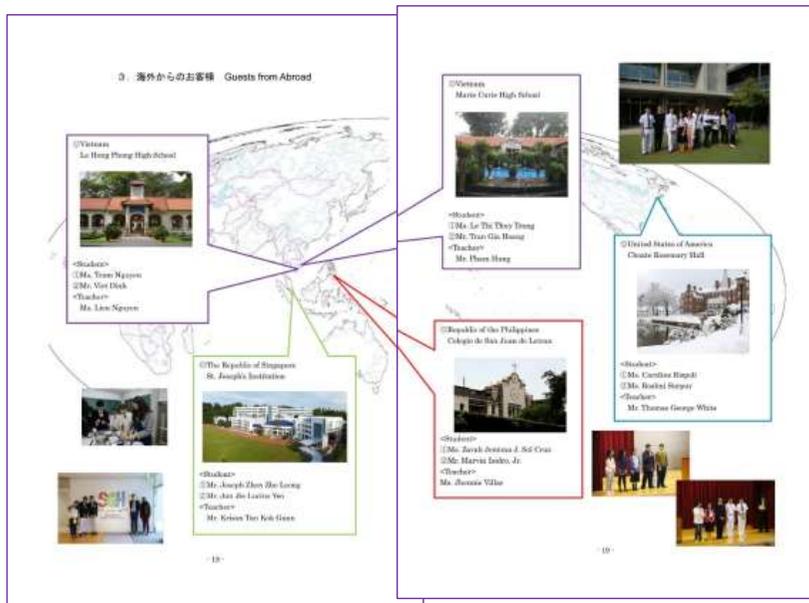
国際シンポジウム冊子資料

第IV部（「本年度前半の記録」〈英語版〉）を除き、英語をできるだけ併記、あるいは、見開きに  
対訳の形で作成した。



◎第IV部「本年度前半の記録」〈英語版〉

この部分については、別冊の英語版を作成して別途配布した。



### 7. 3月 国内外フィールドワーク

3月には1年生を対象に、国内(1または2コース)、海外3コース(シンガポール・マレーシア、フィリピン、ベトナム)の研修旅行を行っている。4年間の実施で安定・定着した行事となっている。



〈各フィールドワークの事前学習シート・しおり・報告書等〉





## 編集後記

清風南海高等学校  
SGH プロジェクトチーム

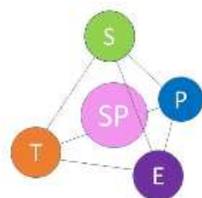
本校 SGH5 年間の事業が終了しましたが、生徒にふさわしい SGH 事業として発想された「STEP ゼミ⇒SP⇒卒業論文」の流れは、高校生としての限界への挑戦でもありました。学年毎に異なる生徒集団や指導する教員の特性に応じた工夫を行いつつ、事業を展開して参りました。その結果、大いなる生徒の成長もあれば、依然課題として残ってしまった事柄もあります。本校といたしましては、この成果と課題を糧により先進的な教育活動を発想し、次の段階に踏み出すべき時期となっております。

今春グローバルコース 3 回目の卒業生を送り出しましたが、それぞれの進学先の大学や実社会において、ここで培われた積極的に真理を追求する姿勢や経験が、自己実現の達成につながるものと期待しております。ある日突然本学を訪れたグローバルコースの卒業生が、目を輝かせてその人生や仕事について語ってくれる姿を目に浮かべることができます。

教育とは人の成長を実現するシステムであり、手を掛ければ掛けただけの変化や伸びが感じられるものであります。その意味で SGH の 5 年間は、将来本校教育を語る上で見逃すことのできない、大変意義深い日々であったと思います。

今後とも本校教育の取り組みに対し、皆様方のご指導・ご鞭撻のほど、よろしくお願いたします。

令和 2 年 3 月



平成 27 年度指定 スーパー グローバル ハイスクール  
研究報告書（第五年次）

令和 2 年 3 月  
清風南海学園 中学校・高等学校  
Tel 072-261-7761  
Fax 072-265-1762  
<http://www.seifunankai.ac.jp/>